第6章

社会崩壊

この危機的な時代に、
一体誰が援助などできるというのでしょう？

—パキスタンの貧しい男性，Pakistan 1993

あと10年で、適者生存の選択がなされるでしょう。
ここでは、最も節操のない人が生き残るのです。

—グルジアの高齢の年金生活者，Georgia 1997

私の物は私の物、あなたの物はあなたの物、
この地域社会の人々はとてもケチなのです。

—エクアドルの貧しい男性，Ecuador 1996a

制度・機構、国家や市民社会、又は家庭における不平等は、社会崩壊を進め、その結果、社会の結束が弱まり、排他的になる傾向がある。経済的・政治的構造改革により創出される新たな機会の恩恵を貧しい人々が得ることは一般的にはない、と彼ら自身が述べている。都市部でも農村部でも貧しい男女は、増加する汚職、犯罪及び法の無効力を直接体験しているだけでなく、血縁者や地域社会の関係が希薄になりつつあるという点にも触れている。こういったことは、都市部でより顕著であるが、農村部でも起きている。例えばガーナの農村部の女性達は、10年程前から労働移民として人々が村を出て行った結果、社会的連帯が薄くなってきている、と述べている。

> *[以前、]男達は自分達自身でグループを作っていました。家の建築や屋根の取り付けに、お互いの協力が必要ですからね。女性も、種まきや雑草の除去、収穫といった農作業をお互い助け合って行っていました。子供を産んだ直後の女性などは、赤ん坊の面倒を見る若い女の子達や、薪を運んだり、赤ん坊が病気のときに世話をする年配の女性達にも支えられていたのです。個々の家庭もお互いに協力し合おうとしていました。女性達は、グループになって子供に食べさせるための食糧を探しに行き、林に入って木を切り、薪を得、木炭を焼いて売っていたのです。また、村長や長老達には周囲の人々からの尊敬と権威がありました。*
> ―ガーナで実施されたPPAの報告書より，Ghana 1995a

同様に、イエメン共和国の貧しい人々は、家庭相互の信頼関係が弱まっており、互いに協力ができなくなっている、と話す。「地元の商人やビジネスマンは、助け合いの意識に欠け、伝統的な連帯意識を持たないために非難されている。そのため、地域委員会を結成したり、地域プロジェクトの実施又は維持に必要なお金を募ることが難しくなっている」(Republic of Yemen 1998)。

ナラヤンによると、全ての社会で人々は、民族、カースト、人種、部族、階級又は血縁関係によって階層化された社会集団の中で生きている。人々が安心して将来の見通しを立てられる環境を、国家の制度・機構が作り出すことができない場合、力の非対称性が、極端に先鋭化されることもあり得る。これに応じようと、社会集団が自分達の仲間に安心感を与えるために、団結することもあり得るだろう。しかし、個々の社会集団が結びつきを強めること(結束)で、既存の亀裂を悪化させたり、集団から既に除外されている人々をさらに増加させてしまう可能性もある(排除)。ある集団内の結束が様々な集団間の社会結束の崩壊によって引き起

こされるとしたら、制度・機構というものは、もはや公正に社会を是正していくための主体ではなく、党派的な利益を追求するだけの手段となる（Narayan 1999）。

こうした場合、個人と集団の要求を調整する役割を担う国家と市民社会の制度・機構に対する信頼は、ひたすら下降することになる。社会制度に対する信用が失われると、人々は社会の中というよりはむしろ、集団の中での安心を強く求めるようになり、不安や社会排除の悪循環を募らせ、紛争や暴力などの度合いを高めたのである。家庭内暴力、地域社会内の犯罪及び暴力、また国レベルの大規模な汚職や市民紛争という形で証明されているように、社会崩壊という現象は社会に深く浸透している。世界銀行の報告によると、こうした深刻な紛争により、1980年以来50ヶ国以上の人々が苦しみ続けており、その直接的結果としておよそ3000万人が移住を余儀なくされている（World Bank 1998）。

本章では、初めに社会的結束という現象の説明と、その結束が失われている理由を議論する。次に、社会的排除の現状、どのような集団が最も影響を受けているかについて述べている。そして最後に、貧しい人々の警察官との経験（事例研究6.1）、未亡人の窮状（事例研究6.2）に関する事例研究を基に本章を締めくくる。

社会的結束

> *袋の中にいくつかジャガイモが入っているのが見えるでしょう？これは私が自分で働いて、きちんと返すという信用のもとに人から借りてきたものなのよ。*
>
> —ケニアのある母親, Kenya 1997

社会的結束とは、家庭、地域社会、又は国家レベルで、互いの協力や平等な資源の分配を促進するための、個人と社会集団とのつながりである。社会的結束は、社会を安定させ、貧困という物質的・心理的ストレスを解消するために必要不可欠である。また、社会が結束することにより、個人や集団は自己のアイデンティティを確立し、力の無い集団を排除するのではなく、むしろそのような集団を招き入れるようになる。貧しい家庭では、社会の団結を図り、精神的に支え合い、日常の仕事に対する支援を得、少額融資や仕事を手に入れ、家の建築や作物の収穫といった困難な仕事を達成するために、社会上のつながりが利用されている。インドにおけるPPAの報告によると、ある地域には「しっかりとした社会的な結びつきがあり、非日常的な状況、つまり突然の病気や自然災害、事故などの際にその力を発揮している。このような事態が発生すると、困難に窮している人々に対し

て経済的・道徳的な支援を行うため、村人達は自分達の資源やエネルギーを共同で出し合うのである」(India 1997a)。

地域社会レベルでの社会的結束は、人々に安心感をもたらし、態度・品行を規律し、地域全体の生活水準を改善する財産となる。社会的結束は、物質的豊かさを含むが、それだけに限定されてはいない。パナマの調査には、制裁という制度によって強く維持されている社会的結束の一例が挙げられている。(本調査によると)ある地域社会では、「作業から生まれる団結力が失われないように」、地域活動プロジェクトに参加しなかった男性に対し、5バルボアの罰金を課すなどのシステムを適用しているという(Panama 1998)。

国家のレベルでは、団結している社会はより効率的であり、より豊富な資本を有している場合が多く、崩壊している社会よりも生産性が高いのである。ダニ・ロドリック(Rodrik 1998)は、外的ショックがある中で、1国の経済成長の鍵となるのは、社会紛争を調停する国家制度が存在することだとしている。社会的結束は通常、政治的安定を伴い、財産権や市民権が確立されていて、国内外の投資家による民間投資が促進されることを示す。

ロバート・プットナム(Putnam 1993)らは、社会関係資本の欠乏は単に「大雑把な意味で地域社会が欠如していること」ではないということを実証した。プットナムによれば、むしろ、社会的結束や市民参加は「より良い学校教育、より安全な道、より迅速な経済成長、より効率的な政府、そしてより健康的な生活のための、実質的な必要条件なのである。社会関係資本の供給が十分になければ、社会制度・機構は弱体化し、その効果も失われる」という。社会的結束は、人々が貧困の心理的な面に対処する上でも重要な役割を担っている。ジョバンニ・サルトリ(Sartori 1997)は、人間は「自らが属するものの中に、絶えずアイデンティティを探し求めている」と言う。社会的結束には、貧困によって生み出された心理的な孤独感に対処する上で2つの効果がある。1つは、貧しい人々がたとえ最も劣悪な身体的・経済的状況におかれていても、社会的結束の下で、彼らの人間性が認められること。もう1つは、同様の社会上のつながりを通じて、資源へのアクセスを増加させるということである。

地域社会内の結束の弱まりは、友人や近隣の人々だけでなく、血縁者や他人への伝統的なもてなし方にも影響を与える。例えばウクライナでは、家族や親戚、親友などは、頼りにするものとして以前にも増して重要になってきてはいるものの、収入の減少と共に、交通費や通話料、さらには郵便料金の値上がりが原因で、彼らとの連絡、年老いた両親の面倒、さらに子育てまでもが困難になっている。ウクライナの独立以来、新たに設けられた国境は多くの家族を引き裂いた(Ukraine 1996)。アルメニアでは、血縁者間の助け合いが重要であり強固であるにもかかわらず、以前ほど親戚を助けることが出来なくなり、金銭やモノは親や子、兄弟に

ますます集中して分けられるようになってきている(Armenia 1995)。

エクアドルのアプナグでは、限りある食料を温存するために、お祝い事などには全く参加しない家庭もあるという。マカ・チコでは、儀式は随分短縮化されている。一方、メランでは、 祭りへの支出は、地域社会の一員としての義務から、各家庭の意志に任せられるようになった。村人達は、このことが地域の連帯を弱めているのだと指摘している(Ecuador 1996a)。

ウガンダのカガディに住む貧しい年老いた男性はこのように述べている。

> *貧困は私達と共に常に地域社会に存在していました。それはヨーロッパの人々がやって来るずっと前から存在したのです。貧困というものは、私達の多く、いや、おそらく全ての人々に影響を及ぼしました。しかし、それは違う種類の貧困であったように思います。人々には救いがありました。彼らは共に行動し、貧困が地域社会の特定の人々を痛めつけることなど許しませんでした。彼らは狩猟や家畜の放牧、作物の収穫など、多くのものを共有したものです。生きるために最低限必要なものは十分揃っていました。しかし、今は違います。人は皆、それぞれ独立し、物質的富を獲得した数少ない人々は、ずるずると貧困に戻ることを恐れています。彼らは私達のようになることを望んではいません。だからこそ、もっと土地を得、たくさんの妻を持ち、自分の農場やジンの蒸留工場で働かせるためにたくさんの若者を駆り出すのです。そのため、私達は自分達だけで貧困と闘わなければならないのです。けれども、我々は貧困について十分理解できずにいます。唯一目に見えるのは、貧困がもたらす影響だけで、原因が何かはよく分からないのです。*
>
> —ウガンダで実施されたPPAの報告書より, Uganda 1998

なぜ、社会的結束は失われているのか？

> *最も影響を受けているのは若者です。彼らには国の開発に参加する機会が与えられていません。教育やエネルギーがあっても、彼らは無力感を持ち、希望がなく、危険な存在となっています。*
>
> —ケニアで実施されたPPAの報告書より, Kenya 1997

大規模な経済の混乱、新しいチャンスは金持ち、権力者、或いは犯罪者だけに限られていることに対する不満、雇用を求めての移住、そして警察や裁判所の機能停止により無秩序・犯罪・暴力がはびこる環境が生み出されているため、世界

の至る所で社会が崩壊する傾向を見せている。

経済困難

> *これはただの砂漠ではありません。失業という名の砂漠です。*
> —パキスタンの失業中の男性，Pakistan 1993

> *もし毎日卵を1つ産むニワトリを1羽飼っている人がいたら、その人は月に800ドラム稼ぐことができるでしょう。これは教師の給料に値します。また、もしもその人がニワトリを2羽飼っていて、毎日2個の卵を得ることができるとしたら、大学教授と同じだけの給料をもらえます。*
> —アルメニア・ゴリスの村の役人，Armenia 1995

社会的結束の弱まりは、経済機会の欠如と関連している。東ヨーロッパ、中央アジア、旧ソ連では、社会的結束が弱まったことで、かつて生活を支えていた職業に劇的な変化が生じている。エリートの中には新しい商売やビジネスの機会をうまく利用してきた者もいるが、その一方で貧しい人々はこれら同様の機会から排除されてきた。平等に機会を得ることができないという不公平さが、人々の不満や秩序の低下をもたらし、それがさらに経済困難を増大させてしまうのである。

アルメニアでは、給料の価値が大幅に下落したことによって専門家や教養あるエリートが従来の仕事を辞めなければならない状況が生じている。というのも、彼らはもはや自分の給料では生きていくことができなくなったからである。社会科学分野の上級調査員の1993年夏の一般的な給料はルーブルで25米ドル相当であった。しかし、11月までに給料は平均7米ドルまで落ち込み、アルメニアの通貨が導入された1カ月後の12月までには、その価値は2.5米ドルにまで下落し、その後5米ドルまで回復した（Armenia 1995）。また、モルドバでは、以下のような報告がなされている。

> *貧困によって、地域社会、例えば、以前友達だった人や近所に住んでいた人との間に、亀裂が生じました。人々は皮肉っぽくまた疑い深くなり、成功は不正行為や汚い手を使って得られたものだと考えるため、他人の成功には嫉妬深くなっています。前は仲の良かった近隣の人々や友人で今は成功している人に出会った時など、貧しい人々は自らを恥じ、常に自尊心を傷つけられているのです。この屈辱は、特に子供や若者の場合、厳しく辛いものになります。そのため、彼らは自分の古ぼけた服装を同級生がからかうのを恐れて、家から出た*

がらないこともしばしばです。貧しい人々はあらゆる場面で助け合っていますが、同時に、相互不信や憎しみ、他方で権力者に対する不安もあり、これらが結局、お互いに効果的に助け合って地域の状況を改善するために地域規模で協力することを妨げているのです。
—モルドバで実施されたPPAの報告書より，Moldova 1997

ラトビアの調査では、お金がないために家族以外の人々とのつながりが減少し、それゆえ家族が唯一の避難場所であり、唯一信頼できる社会となっていると報告されている（Latvia 1998）。不幸なことに、財政難は家族にも影響を及ぼし、貧困という果てしない問題が、ストレスや口論、家庭内暴力さえ生み出している、と人々は述べている。ラトビアのある女性は、終わりのない口論のために息子が「攻撃的となり、自分を守るためにいつ手を出すか分からない状態になっている」と述べている（Latvia 1997）。

ウクライナでは、公共セクターの雇用が失われたことによって、貧しい人々が様々な新しい商売の方法を学ぶようになった。それはラティッサと言われるが、文字通り「ぐるぐる回る」という意味である。「金を稼ぐために走り回って、がんばるということは、絶え間なく売買を続けて行かなければならないことを意味する。そして、複数の仕事をするためにすさまじい努力をし、全ての試みが失敗した時に備えて、常に先回りするのだ」という。ウクライナの最も積極的に雇用を求めている貧しい人々が言うには、貧困の原因は、旧ソ連崩壊後の市場原理志向に基づいた新しい世界において、「仕事のやり方を自分達が知らなかったからだ」という（Ukraine 1996）。

開発途上国の貧しい人々にとって、失業は厳しい現実になってきたようだ。カンボジアが戦乱で疲弊している中、移住した者は困難を抱えているが、それでも幸運な人々と考えられている。その一方で農村に残った人々は敗者として見られる。カンボジアのPPAは「ここ何年か、ごく少数の家族が儲けている一方で、全国の農村地域における大多数の人々は敗者となった。私達は湖や川にいる魚を釣ることもできなくなった。エンジンのついた新しいボートが大規模漁業のために用いられ始めたからだ」（Cambodia 1998）。パキスタンの貧しい人々は、新しい雇用の機会は彼らの手の届かないところにある、と述べている（Pakistan 1993）。ネパールのPPAは「人々は働きたがっている。彼らはいくらか知識や技術は持っているのだが、それを生かすチャンスに巡り合えないでいる」と報告している（Nepal 1999）。ジャマイカで調査対象となったグループは、暴力を経済上の必要性と強く結び付けている（Jamaica 1995）。ケニアや南アフリカの貧しい人々は、収入を得る機会の不足について多く語るだけでなく、そのことが暴力の増加と関連しているとはっきりと述べている（South Africa 1998）。エチオピアの貧しい人々は、失業者は

「失業のせいでドゥラエネット（家庭や地域では受け入れられない、道徳的に認められない行為）をせざるを得ない状況に追い込まれているのだ」と述べている（Ethiopia 1998）。

出稼ぎ・移住

男達はみな、働きに出て行ってしまうので、私達妻は独り残されるのです。
—エクアドルの貧しい女性, Ecuador 1996a

家族や地域社会、国家内の結びつきは、人々が職を求めて出稼ぎをせざるを得ない状況になったときに、失われ始める。長い間に渡って後に残された家族達には、地域社会との関係の維持や地域に貢献する時間や資源が少ないのである。エクアドルの地域社会では、「共同社会の組織が最近ひどく弱まっており、それは男性が沿岸の都市中心部に出稼ぎに行くようになったことに一因がある」（Ecuador 1996a）。同様にインドでも、カーストのパンチャヤット（伝統的なカーストを基盤とした協議会）といった地域間の制度上の枠組みが、着実に損なわれてきている。その主な原因は、地域社会の集会の数を減らし、カースト規範に対する若者の態度に変化をもたらした出稼ぎにあると、カーストの年長者達は考えていた（India 1998d）。

さらに出稼ぎは、出稼ぎ先の社会的結束を弱めることもある。例えばエチオピアでは、都市部の女性がメードとしての働き口を失ったところに、農村部から来た女性の出稼ぎ者が加わり、結局彼女達のほとんどは他に働き口がないため、売春婦の数が増加する傾向をたどっている（Ethiopia 1998）。ウクライナの出稼ぎ者は、移住先の町で地元のネットワークに溶け込むことの難しさを述べている。ある男性は自分が苦労している理由は、「自分の出身がカルキフではないため、親戚や子供時代からの友人のネットワークがなく、働き口を見つけるのが難しい」ためであるとしている（Ukraine 1996）。

南アフリカのPPAは、アパルトヘイト時代の黒人強制移住や、大規模な出稼ぎ、労働力の流動性、そして広範囲に渡る暴力が、社会的結束の低下の一因となっていると結論づけている。「その結果、多くの地域社会が極度に分裂し、人々のニーズや理想をみてもほとんど共通点を見出すことができなくなってしまい、」結局、「地域社会という概念が、南アフリカでは非常に希薄なものになってしまった」（South Africa 1998）。同じPPAでは、回答者は地域社会のネットワークによる支援についてはあまり触れず、触れたとしても労働の対価としての支援に限定されたものである、としている。ウブントゥという持ち物を共有する伝統的な方法は、物質的・社会的圧迫によって見られなくなってしまった。南アフリカの調査を受けた

人々の多くは、もはやこの慣習に誰も従っていないことを残念に思っており、またウブントゥがなくなってしまったことで、貧しい家族達の負担が一層増えたということにも触れている（South Africa 1998）。

ニジェール（Niger 1996）では、一家全員の出稼ぎは、ひどい貧困の結果によるものと考えられている。「金持ちでも貧乏でも出稼ぎはする。金持ちは商売を始めるために金を持って土地を離れ、貧乏人は食べ物や仕事を探すために移動し、たびたび耕作の時期に村へと戻って来る。貧しい出稼ぎ者は、小さな工芸品の作成やお茶や水の販売など技術を必要としない仕事を求めている。そして時々、時計やラジオを土産として村へ持ち帰り、これらを売ったお金を旅費にしてまた村を後にする。また、中にはエイズや性病、その他の病気にかかったために、村に戻ってくる者もいる」（Niger 1996）。

無法状態

> *隣人同士で論争が生じでも、これを解決するための法的手段はほとんどありません。*
> —モルドバで実施されたPPAの報告書より，Moldova 1997

> *職場からモノが盗まれることは昔からあった。しかし今では、その程度が全く違っています。*
> —ウクライナで実施されたPPAの報告書より，Ukraine 1996

> *人々の平和や安全を脅かしているのは、まさに戦争で使用される本物の兵器です。*
> —カンボジアで実施されたPPAの報告書より，Cambodia 1998

貧しい人々は、無法状態や無秩序状態が増加していると頻繁に感じており、また同時に正しい行動に関する社会概念も大きく揺れ動いてきたとも感じている。これは、社会的結束の低下の原因でもあり結果でもある。地域社会ネットワークのつながりがあまりに弱かったり、国からの十分な支援がない場合、相互支援の建前はご都合主義へとあっという間に変化し、地域社会の結束は崩れ始める。結束のない地域社会には、隣人同士の不信感、個人間の犯罪や極度の暴力行為から生まれる恐怖がつきものである。警察や裁判所が機能していない場合（事例研究6.1参照）、無法状態は犯罪の温床となる。これは特に東ヨーロッパ、旧ソ連及びラテンアメリカにおいて深刻である。

ケニアでは、「生活が苦しい時、貧しい人々は生きるために商店や農地から盗

まざるをえなかった」(Kenya 1996)。モルドバの報告は、人々はかつて、近所の家や畑から盗みをはたらくことはめったになかったのに、最近では「家族用の馬でさえも持って行ってしまう」としている(Moldova 1997)。人々は、盗みを止めさせることはもはや無理だと感じている。ある男性は、えさを用意できないという理由で、番犬を飼わなかった。その結果、300レイの価値がある300リットルのワインの樫樽が盗まれた。彼は犯人が誰か分からなかったので、警察は特に努力することもせず、捜査を打ち切った。

貧しい人々は、モルドバの無法状態について、様子を以下のように伝えている。道路は「攻撃的で酒に酔った若者」であふれ返っているために、多くの人々は夜間の外出を恐れている。助けがやってくることはほとんどないため、男女を問わず、残忍な暴力行為を受けるのがしばしばである。ある地域では、「未亡人が、自分の10歳になる娘の目の前で、7人の男達によってレイプされた。そのうち3人は戻ってきて彼女を再度レイプしようとしたが、彼女はやっとの思いで窓から逃げた。それ以来彼女は妹の家に住んでおり、自宅に戻ることを恐れている」(Moldova 1997)。

社会的結束が崩壊すると、集団としての行動は難しくなる上、社会規範や制裁行為によって、人々の行動を規制することは不可能になる。パナマの研究者達によると、社会関係資本の乏しい地域社会において、規律を守ることが社会にとって利益になることがはっきりしている場合でさえ、最も基本的な規範を守らせることは困難であるということが明らかになった。例えば、ある地域社会では、その地域レベルの政府が、家に電気を通すための資金を居住者に貸したが、誰1人借金を返す者はいなかった。他の地域社会では、もし隣人との間に何か問題が生じたら、それを仲裁し、判断するのはレジドールの代表者であることになっている。しかし、パナマのPPAによると、「私達は(彼、すなわち代表者を)信用していない」という(Panama 1998)。

近所の子供達を躾ることは、この地域社会では望ましいこととはされていない。「ある者が、(粗野な振る舞いをしている子供達に対して)注意をしようとすると、(逆に子供達から)悪態をつかれるのが関の山」だからである。また、信頼の喪失は活動の組織化を妨げる。「人々が互いに敬意を払う気持ちは失われている。たとえ誰かが(地域の発展のために)行動を起こしたいと思ったとしても、常に誰かがそれに必要な金を盗むのだ」という。同じ地域社会で調査の対象となった人々は、子供達がいまにも暴力に訴えようとしているように見えると述べている。パナマのPPAによると「彼らは挨拶もしない。(人を)尊敬もしない。ただ人を殴りたがっているのです」(Panama 1998)。先住民が住むある島の地域社会において、シャヒラス(長)は社会規範が次の世代へと伝えられていないことを懸念している。「両親は何も指導しない。若者は畑に出(て仕事をす)る気もない。彼らは1日中

ダラダラと過ごしたがっているのです」(Panama 1998)。

アルメニアでの調査員の報告によると、「特に農村地域において、政府以外に、力を持つ自助的組織や先住民の地域権力機構は依然として現れていない。しかし時として、人々は1つの仕事を協力して行うことがある。例えば、小さな難民のグループはハイクからエレバンまで出かけて行き、そこで政府の難民委員会に不満を伝えた。このような集団は当面の仕事が完了するとすぐに解散する。たいていの人々は自分達の家族をあてにするか、当面の生存を図るために、親戚一族と協力していくのである」(Armenia 1995)。

犯罪と暴力

> *「マフィア」の組織は途方もなく大きく、文字通り、いかなる政府機関にも存在します。以前はコサックの真似ごとをして遊んでいた子供は今や髪を短くし、強盗の真似や「マフィアごっこ」をして遊んでいるのです。*
>
> ―ウクライナで実施されたPPAの報告書より, Ukraine 1996

国の公的な、或いは地域の慣習的な裁判システムの欠如や警察の機能不全がもたらす一般的な無法状態は、極限までいくと、犯罪や暴力へと発展し、悪循環に陥ってゆく。旧ソ連時代には、農村部で、ある家族の持ち物が他の家族に盗まれるということはほとんどなかった。しかし、ウクライナの農村部に住む人々は、最近では、彼らの貯蔵物や倉庫が襲撃され、家畜が盗まれると述べている。ある人の報告では、親戚が苗を植えたところ、数時間後には畑からそっくり誰かに持っていかれたという。「農村に蔓延するこうした犯罪の増加は、地域社会の結束や地域の連帯性が崩壊していることを象徴している」(Ukraine 1996)。

タイの貧しい人々は自分の身に対する危険や不安を感じていると伝えている。彼らが最も懸念しているのは子供の将来である。働くためではなく空き巣から家を守るために、親によって退学させられた子供もいる。このように信頼性が欠如し、生存競争が激化している中で、自由な時間も減少し、地域集団の団結は脆弱化してきていると述べている。家庭内や地域社会、そして、国内での争いの増加は警察が存在しないことと関係があると人々は述べている(Thailand 1998)。カンボジアでは、(手榴弾、小型ライフル、地雷といった)小型武器が一般化した結果、予測不可能な恐怖や暴力が頻繁に生ずる社会が生まれてしまった(Cambodia 1998)。

ジャマイカではギャングの暴力により、インフラ整備や維持が進んでおらず、結果として犯罪や戦争を悪化させ、地域社会の結びつきを弱めている。電話はかつ

て暴力を減らすための手段として広く知られていた。しかしマカ・ウォークでは、「電話会社の社員が電話線を引こうとしたところ、地元の若者達から投石されたため、設置はいつまで経っても終わらなかった。人々が頻繁に指摘した点だが、パーク・タウンにおける社会的な団結の度合いを示しているのが電話ボックスである。(そこにある)たった1つの電話ボックスは、これまで1度も壊されたことはなかった」(Jamaica 1997)。この種の暴力は、たとえ乱暴者にとっても、不利益になるからである。

オーバックによると、精神分析医が指摘するところでは、「無力さに直面している場合、暴動の際に店や車を破壊するような暴力や破壊行為は、貧しい人々が、自らを力を持つ者と一時的に錯覚している状況にある、と考えられる。つまり、人々は、ただ意味もなく地域の施設などを破壊しているわけではない。彼らは自分達の不快な感情を、悪意に満ちたと思われる環境に投影し、彼ら自身の感情を荒らされたのと同様に、環境を荒らすのである。彼らの行動は、彼らの社会的経験を反映した内向的感情を実現しようとしているものである」(Orbach 1999)。

エチオピアのPPAの参加者は、1990年代に増えたり減ったりの波を繰り返した犯罪や暴力について、時系列的に議論する場を設けた。テクレハイマノト(Taklehaimanot)での調査に参加した人々は、1990～91年にかけて、政権交代が行われた時期に初めて犯罪の増加があった、と述べた。そして1994～95年に、失業率が上昇し、警察の権力が弱くなった時期にも犯罪が増加した。最近では、1996～97年にかけて犯罪が劇的に減少した。この現象は特に地域社会レベルで力を持つ警察官の数が増加してきた結果である、としている(Ethiopia 1998)。テクレハイマノトの参加者は、犯罪の増加と国や機関の権力衰退とは、密接に関係しており、同時に、犯罪率が最も低い時期というのは、国家がうまく機能し、地域社会の協力によってさらにそれを補うような形で支えられている時期である、と述べている。

こうして見てみると、経済、政治、社会の大幅な変化により、世界の多くの地域で個人は孤立し、地域社会は分裂していることがわかる。貧しい人々は、社会の変化に対応する術に乏しいため、この状況は、彼らにとって特に深刻である。それまで自分自身の生活の保障を地域社会のつながりに求めていた人々は、身の不安や脆弱性をこれまでにも増して経験することになる。急激な経済の変化によって得られる機会をやっとのことでものにする人もいれば、同じような困難な状況でも、幸運に恵まれ、一生懸命働いて活躍する人もいる。例えばウクライナでは、貧困から脱け出すための鍵は「人脈、個人の努力、そして才能」であるとみなされている(Ukraine 1996)。大規模な変化が国中で起きている状況では、概して貧しい人々は自らを勝者ではなく、明らかに敗者として捉えている。彼らの喪失感や脆弱性は、国家の本質を担う機関との関係、つまり警察との関係において、

最も的確に示されているといってよい（事例研究6.1参照）。

社会的排除

あなたは私達の仲間ではありません。
—グルジアで実施されたPPAの報告書より，Georgia 1997

人々が次第に孤立していくにつれ、彼らは情報や援助から切り離されてしまい、自分達で問題を解決したり、再び社会に戻ることができなくなってしまうのです。
—ラトビアで実施されたPPAの報告書より，Latvia 1998

村内では、部族の人々とそれ以外の人々との間に社会的な隔たりが生まれる傾向があります。
—インドで実施されたPPAの報告書より，India 1997a

センによると、社会的排除は「貧困における、相互関係の特徴」を強調する（Sen 1997）。ナラヤンは、社会的排除は、ある特定のグループが社会における、社会的、経済的、文化的、そして政治的生活へ平等かつ効果的に参加することを阻む、規範及びその過程を意味するという（Narayan 1999）。つまり、社会的排除という結果と、社会的排除をもたらす過程の両方のことである。それ故、社会的排除は少なくとも四つの要素を含んでいる。その要素とは、排除される人々、貧しい人々を排除する制度・機構、排除を行う者、そして排除が生まれる過程である。社会的排除とは、社会上の関係から生ずる現象であり、力を持つ者が関与し、力を持たない者が影響を受ける、という現象なのである。こうした関係は、排除された者達の集団内にさえ力の不均衡が見られるために、さらに複雑になっている。

PPAの調査によって、社会的排除と貧困との間に密接な関係があることが明らかになった。女性、子供、老人、未亡人、エイズ患者といった社会から排除されている人々の大半は、資源や権力へのアクセスをもたらすネットワークから切り離されている。この状況がこれらの人々を脆弱にし、彼らが貧困に陥る危険性を増加させるのである。貧困であることそれ自体、貧困がもたらす社会的汚名が原因で、社会的排除の対象となる。この社会的排除のサイクルを崩すことは可能である一方、社会的排除は世代を越えて広まる可能性もある。メキシコの調査員は、子供達にどうしたら貧困に歯止めがかかるかと尋ねた。すると子供達は、「遺産をもらう」、「アメリカで暮らしている親戚からお金をもらう」、「信仰をもって、毎日お祈りをする」と回答した。また、なぜ金持ちと貧しい人々がいるのかと質問すると、

「運命」、「このように、神様がこの世を創ったから」、「金持ちは悪魔が作り、貧しい人は神様が作る」と彼らは答えた。これらの回答は、自らのコントロール、個人の努力、勉強、労働の範疇外の要因を挙げており、自らの社会的、経済的地位を向上できるとは思ってもいない（Mexico 1995）。

社会的排除が経済的貧困を導き、また社会的排除と貧困は深い相互関係にあるものの、それらは全く同一の概念という訳ではない。社会的排除の特徴である差別や孤立は、生活水準にマイナスの影響を与えている。この関係には2つの側面がある。1つは、貧しくなることで社会的汚名を着せられ、それが制度からの排除に結びつき、その結果貧困をより悪化させる、という面である。もう1つは、社会的排除は必ずしも経済的貧困にはつながらないが、制度からの排除と必ず結びつくため、生活に対する満足感が必ず低下するという面である。

どのように排除されていくのか？

> *地方では、特に親が町に行くことを恐れていたり、グルジア語を話せない場合、彼らは治療を受けることを思いとどまってしまいます。そして、子供をどこに連れて行けば良いかわからず、治療費を払えないのではないかという不安を抱えているのです。*
> —グルジアで実施されたPPAの報告書より，Georgia 1997

> *カーストのそれぞれの階層は、階層間で食事をすることや、他の地域から水をもらうことに関する厳格な規範を守り続けています。（その規範に対して）違反が生じた場合、村の中で争いとなるのです。*
> —インドで実施されたPPAの報告書より，India 1997d

クリスティーン・ブラッドリーは、影響が比較的少ないものから大きいものの順に、社会的排除がもつ5つの要素を挙げている。その要素とは順番に、地理的環境、参加にあったての障害、汚職、脅迫、及び身体的暴力である（Bradley 1994）。これらの障壁は、PPAに参加した多くの人々の生活を大きく左右するものとみなされている。

地理的環境

> *ここの住民は皆貧しいです。なぜならこの村には学校もなければ診療所もないからです。もし女性が難産になったら、昔ながらのやり方で布を2本の棒の間に結び、それに女性を乗せて病院まで7km歩かなくてはなりません。そのようにして7km歩くのに、どれくらいの時*

間がかかるか想像できますか？ここには私達を助けてくれる人はいません。だから私達は皆貧しいのです。
—トーゴで実施されたPPAの報告書より，Togo 1996

ラバリオンによると、社会的排除には地理的要素が強く、地方に住んでいるために疎外されている状況と貧困は直接的な相互関係にある場合が多い（Ravallion 1995）。多くのPPAの報告によれば、地方の村の貧しい人々は、町にある病院や学校に、そう簡単には出かけられないという。グアテマラのエル・キシュの市長は、「地域社会の医療に関連する問題、或いは、最も差し迫って必要なことは、薬を買う金銭的余裕の欠如や、治療を受けさせるため、最も遠い村から町まで病人を連れて行かなければならない、ということです」と述べている（Guatemala 1997b）。地方の貧しい人々は、遠方の学校、病院、その他の施設を行き来する交通手段を見つけなければならないだけでなく、その旅費だけでも収入が消えていく。貧しい人々は辺境の地域に暮らしていることが多く、それが原因で貧困や排除が一層ひどくなっている。バングラデシュの貧しい人々の多くは、侵食した川岸に暮らしており、真っ先に洪水の被害を受けるのは彼らである。地方では、貧しい人々は生産性の低い土地に追いやられている。

都市部でも、排除される人々は生み出される。ジャマイカでのPPAの報告によると、「ある若者達のグループは、彼らの居住地域の評判が悪く、その地域住人全員が犯罪者、もしくは共犯者というレッテルを貼られてしまい、外部の人や警察からは軽蔑され、職にも就けず、商売の仕方を学ぶことができない、と論じた。若者達は、この状況が空腹や不満、いらだちといった感情を生み、ギャング間の抗争や銃撃戦を引き起こした末、死亡したり、投獄されたりするのだ、と考えている。地元男性の労働人口に期間の定められた仕事がある間は犯罪や暴力が減少するが、ひとたび仕事の契約が切れると、犯罪は再び増加し始める」（Jamaica 1997）。

アクセスに対する障壁

キン人が書類に書き込み、役所に申請し続けてすでに1年になりますが、未だに認められていません。役所の証明がない限り、ベトナムの土地所有権は保証されないのです。
—ベトナムで実施されたPPAの報告書より，Vietnam 1996

土地を私有化するには、何週間も何ヶ月もの間、地方と行政機関の間を行き来しなければなりません。
—モルドバの農場関係者，Moldova 1997

申請費用と書類の提出要求の2つは、貧しい人々のアクセスに対する障壁のなかで、最も一般的である。申請費用とは、モノやサービスを受けるために必要となる費用のことで、実値より高い場合もあれば安い場合もある。次に挙げるのがその1例である。

> *モルドバに住むバレンティナは2週間のうちに心臓とヘルニアの手術、及び胆石摘出を受け、術後4週間入院していました。その間に、彼女の年老いた両親の貯蓄のほとんどが治療費と薬代に消えました。彼女が救急病棟にいる間、看護婦にそれぞれ10レイずつ支払わなくてはなりませんでした。そうでもしなければ、食事を与えてもらえなかったことでしょう。注射をする際には注意を払ってもらえるよう、さらに10レイ支払いました。治療の終わりに、担当医は自分達を夕食に招待するように、バレンティナの母親に要求しました。母親は黙って従い、食材を購入するためにいくつかの家財道具を売りました。なぜなら、もしバレンティナが再入院することになったら、医者の技術ではないにしても、彼らの好意には頼らなければならなくなると思ったからです。彼女は、彼らの技術は不足だと思っていたのです。*
> ―モルドバで実施されたPPAの報告書より，Moldova 1997

国の官僚制度がからんで起きる障壁は、書類の提出要求の際に顕著に表れる。国は、排除されている人々が資源にアクセスできるよう支援することに関して、柔軟な対応を取らない場合が多い。カメルーンのPPAの報告によると、「国の身分証明書を持っていないため、最北地方に住む女性達が国の機関を利用するには、かなりの制限がある。身分証明書がない限り女性は投票権もなく、裁判の手続きも出来ず、家の敷地から外に出ることもできない。女性は重要な家族内の資源配分に関して伝統的に口を出せず、家庭における意思決定権もない。また女性達の多くが政府行政官の言葉が理解できず、発言する機会がほとんどないのである」（Cameroon 1995）。

貧しい人々を排除する手段である書類提出は、貧しい人々が資源を得られないことの原因の1つであると数々のPPAに共通して報告されている。

> *間接的に政府によって引き起こされた問題でも、政府による解決が必要な問題がある。それは書類の問題である。特に都会に住む貧しい人々に聞き取り調査をしたところ、書類不備のために、プログラムへの参加やサービスを受けることが出来なかったり、仕事に就*

けないことに対するいらだちを示した。メキシコシティに住む母親は、自分の子供の出生証明書を持っていなかったため、授乳プログラムへの参加を拒否されたと話してくれた。同じ市に在住する男性達も、身分証明書（例えば選挙権登録証など）の不備のために仕事に就けなかったと言っていた。メキシコシティで聞き取り調査をした人のうち、土地の所有権を証明する法的な書類を持っている人は15％しかいなかった。もし彼らがリーダーに従わなかったり、リーダーが見返りとして求める要求に応じなければ、リーダーは住民を立ち退かせるように仕向けることができる。
—メキシコで実施されたPPAの報告書より，Mexico 1995

書類に関する問題は、数ある障壁のほんの一部を象徴しているに過ぎない。その他の障壁としては、排除されている人々が煩雑な手続きを行う際に味わう、官僚の敵意に満ちた不公平な態度を挙げることができる。この場合、書類はある特定のグループを社会的に排除する手段にもなり、国家が（サービスを求めてきた市民に）恥をかかせ、サービスの提供を断る理由ともなる。

司法制度へのアクセスが極めて重要視される一方、役人は、極めて無礼で非協力的である、と一般的に言われている。交通手段や交通費もまた、司法制度へのアクセスを阻む大きな要因である。南アフリカのPPAには、「裁判所へ行くのは大変です。農場からパテンシーに戻るのに、10ランドのタクシー代がかかります。パテンシーからハンキーへは3.50ランドかかるのです」という声が紹介されている。加えて制度上の問題もまた、司法制度へのアクセスを阻む原因となっている。扶養費を例に取ると、貧しい女性は、父親が不在でも所在が分かるのなら、彼らから費用を受け取ることになっている。この制度は、冷淡で何かと妨害しようとする役人、一般にはびこる無能な行政管理、正しい住所を教えられても父親を発見することさえ出来ない、やる気のない保安官などを相手にしなければならないなどの理由により、女性にとっては不当な重荷となっている。
— 南アフリカで実施されたPPAの報告書より，South Africa 1998

汚職・腐敗

病院にお金や贈り物をあげなかったら、普通の治療も受けられなかったでしょう。入院してから最初の3日間、誰も私のところに治療

に訪れなかったのですし、お金を渡さなければ、誰にも治療してもらえな、というようなことを、同じ病室の患者が私に教えてくれたので、そのことに気付きました。
—アルメニア・エレバンにある病院の患者，Armenia 1996

その女性は、評議委員会からパンひとかけら程度の補助をもらっていました。しかし本当の補助金は、援助など必要のない、評議委員の家族や友人のためにとってあるのです。
—ウクライナで実施されたPPAの報告書より，Ukraine 1996

村長や首長達は、もはや村人のニーズに気を配ろうとはしませんし、行政条例38号1927の下で村人と区別された扱いを受けてきました。住宅用地を与える代わりに村のトップが人々に要求する金、ブランデー或いは家畜を見ても明らかなように、これらの条例は賄賂を助長させています。つまり、人々に与えられた土地の多くは買収によるものであり、賄賂が払えない人々には不法に居住するという手段しかないのです。
—南アフリカで実施されたPPAの報告書より，South Africa 1998

排除されている人々が制度へのアクセスを得る方法の1つは、賄賂を渡すことである。この行為は東ヨーロッパや旧ソ連などで頻繁に行われていた。これらの国々の貧しい人々は、社会保障、年金、仕事、医療、大学進学、仕事上の資格など、何を得るにもつながり（コネ）が重要であると強調している。ウクライナのドネシュクに住むある女性は「お金になる職は親戚か友達のつてでしか得られない」と述べている（Ukraine 1996）。つながり（コネ）は社会から排除されている人々にとって、医療や司法プロセスのような特権へのアクセスを得るための唯一の手段である場合も多い。地方公務員の汚職は世界共通の問題である。例えば、マダガスカルでは「フィライサナの社長が職権を濫用し、公共の水を商業化した。水が貴重な資源である地域で、流域外に住む人々のために、トラックの運転手が勝手に水を運び出すのは言語道断だ、と彼は話す。そこではこの社長が事実上の政府であり、人々は彼の行為が問題であると知りながら何も言わない。調査の対象となった人々は、これは特に珍しいことではなく、他の多くの地方でも起きていると言う」（Madagascar 1996）。

ウガンダでは、医療サービスを受けるために賄賂を支払うことが当然のこととされているようだ。ある貧困男性は「ジンジャ病院ではまず最初に、自分の名前を記録してもらう台帳に500シリング払い、次に医師の診察料に500シリング支払う。

もし中国人医師に診てもらいたければ、更に1000シリング支払わなければならない。この場合、この中国人医師の元に連れて行ってくれる人にも、足代を支払わなくてはならない。この値段は交渉次第だ。もしこの病院での入院が認められたら、患者は毎日500シリング払うことになる。仮に患者がマセセから来たと誤って口を滑らせてしまえば、その人はまず、治療してもらえない。私達はとても貧しい」と報告している（Uganda 1998）。

モルドバのPPAは、路上でひどく殴られたために7ヶ月間入院していた男性の様子について記している。「警察がその男性を助けたにもかかわらず、彼を襲った犯人達が彼を殺すと脅したため、被害者男性は事件を裁判所に訴えることを諦めた。さらに犯人達は、彼に80レイを渡し、そのお金で裁判官を買収し、訴訟を取り下げるように頼むよう要求した。（彼は）それに従った」（Moldova 1997）。汚職は恐怖心や犯罪を助長させる。

汚職の影響は深刻である。なぜなら、汚職は貧しい人々を財政的な面でアクセスから遠ざけるだけでなく、社会が効果的に機能するために必要な信頼をもなくしてしまうからである。汚職は、貧しい人々や社会的に排除されている人々が、国から公平な扱いや平等なアクセスを得ることを不可能にし、より大きい社会から貧しい人々を一層遠ざけていくのである。汚職は社会がますます不安定になる1番の要因である。社会不安の増加は社会の溝を深め、社会崩壊と社会排除を増加させていく。

脅迫

> *夫と私は、もう私が働いていた時ほど仲良くありません。特に子供がまだ幼いため、私には彼しか頼る人がいないということを、夫は良くわかっているのだと思います。私は彼のことが怖い。しかし、子供達を守るためにはやれるだけのことをやって、彼の言うことに従うしかありません。*
>
> —南アフリカで実施されたPPAの報告書より，South Africa 1998

精神的暴力は、ある個人や集団を孤立させる手段として珍しいことではない。全PPAのうち、実に50％が暴力による脅迫について言及していた。一般的に権力者達は、力のない者達への支配を維持するために、もっともらしい理由をつけ、力のない者達を脅迫するのである。

脅迫というものは、社会のどの層においても確認されている。社会的排除のメカニズムとして、脅迫行為は社会で一般化した考え方と力関係をより強めることに用いられる。例えば、インドでは、カースト制度による社会的排除が未だ根強く

残ったままであるとPPAに報告されている。「ピッチャル・バリクさんの幼い孫娘がある日、カイルマル村にある管井戸に触れた。それ以来、村民はその井戸から水を汲みたがらなくなった。彼らは村人の集会を開き、バリクさん一家を処罰すると脅しをかけた。バリクさんは村人に対し、孫娘の行いについて謝罪しなければならなかった」(India 1998a)。

マダガスカルの例では、地域の役人が説明責任という新たなメカニズムを果たさなくても済むように、脅しを利用しているという。「関係者は、政府の役人と徴税官吏の両方に、農産物の価格を独断で決定できる権限を与える。そして役人と徴税官吏は、生産者側が他の業者へ転売することを禁じたり、販売ができる時期を勝手に決め、これらに従わないと購買を拒否するといって脅すのである。農民らによると、徴税官吏は時々、農民が穀物を市場に運べないように、報復として道路や橋の修理を妨害するという。彼らはまた、農民達が組合の集まりに出かけることに対しても激しく妨害する」(Madagascar 1994)。

影響力のある組織は、たとえ彼らが明らかに貧しい人々の支援に従事していても、組織の目的や基準を達成するため、脅迫行為に出てしまうことがよくある。バングラデシュのグラミン銀行は、貧困女性に対する援助活動で有名である。銀行内で最も位の低い職員(男性が大多数)は、貧困女性のグループと働き、彼女達に少額の融資金を毎週確実に返済させることを職務としている。しかし、女性達に返済のための選択肢が多くないことを知っているため、融資金の回収業務に対する熱意とそれによって得られる報酬が原因で、時として回収業務を脅しへと悪化させてしまうこともある。バングラデシュのあるフィールドワーカーは次のように記している。「コデジャはホゴルバリアに住んでいる。彼女は長いことグラミン銀行の信頼のおける会員で、分割の払込金も常に期限内に支払っている。不幸なことに、彼女の夫と義弟を交通事故で失ったため、次の支払いを返済日までに終えることが出来なかった。するとグラミン銀行の職員は、プロジェクトの他のメンバーやコデジャの家族に力ずくで彼女の分を返済させようとせまった。ある女性は『彼らは本当に残酷だった。もしまた同じような振る舞いをしたらみんなで打ちのめしてやるわ』と言っている」(Bangladesh 1996)。

最後に、南アフリカでは、暴力による脅しは、男性が女性を支配するためのよくある形態であると報告されている。子供の養育費をどう手に入れるかということについての議論で女性達は、裁判所から支持されている合法的な手段であるとしても、自らを危険にさらすことになるので、夫に対して養育費の要求を強くは主張したくないと繰り返し強調した。「夫を探しに行くのは危険です。けがをさせられるかもしれません」(South Africa 1998)。

身体的暴力

あの若者達は別世界の住人です。彼らは何も信用しません。彼らは相手の体格など気にもせず、人の持ち物を気に入ればそれを奪い、他人の家に押し入る必要があれば、ためらうこともありません。
—ベネズエラで実施されたPPAの報告書より，Venezuela 1998

毎日目の当たりにしているのだから、死ぬなんて怖くありません。
—ジャマイカ・グリーンランドの若者，Jamaica 1997

社会からの排除は、結果として直接的な身体的暴力を生む。例えば、国家が犯す暴力や、家庭や地域社会内での女性に対する暴力に関して、報復の恐れから、口にされることはない。こうした状況にも関わらず、調査員達は暴力に関する多くの事例や女性に対する暴力を記録することができた。ジャマイカのPPAは暴力の問題を詳細に調査し、地域社会のグループが、個人、ギャング、経済、政治的暴力を含む25種類以上にのぼる暴力を明らかにした、と報告している。年齢、収入、性別、及び地域に関係なく、グループ討論の参加者全員は、政治家がこの地域での銃使用を認めた結果、暴力が始まったという結論に達した。人々は、それまでの政治的暴力が銃使用の始まりにより、個人間やギャングを基盤とした暴力へと移り変わってきた、と報告している。暴力は社会を一層崩壊へと導いているのである。「暴力がもたらす損害は、投資家の信用の弱体、イメージに頼った観光産業へのダメージ、保健や警察の費用の高騰、都市の中流階級の不満の増大とそれに伴う移住、高まる死亡率と疾病率、公共サービスへのアクセスの減少、家庭の機能不全、女性に対する圧迫の深刻化、共同体精神と参加の弱体化、そして恐怖の台頭など、広範囲に及ぶ」(Jamaica 1997)。

南アフリカでは、都市部での暴力の激化が、結果的に都市部への移住率低下につながると言われている。ある地域を訪れた調査団は、その前夜に発生した襲撃で、3人が殺害されたという話を聞いた。「その日は話し合いが予定されていました。若者達は夜がふけていく中、地域社会の安全確保のことで頭がいっぱいでした。話し合いが終わった後、若者の集団は調査員の安全を守るため、彼女達を街の外まで送り届けました」(South Africa 1998)。

タイで実施されたグループ討論は、家庭内、地域社会内、さらには外部の人との争いが悪化してきたことを認めている。バンコクで実施されたグループ討論では、多くの貧しい人々が借金を返済できないために、借金取りから襲撃を受けていると報告している。このことは地域社会での恐怖心をあおり、不安感を増幅させているという。個人レベルの暴力問題として最もよく挙がるテーマは、女性と子

供に対する家庭内暴力である。家庭内暴力は、ジェンダー間の不平等な規範とアイデンティティに根源があり、しばしば飲酒や薬物乱用と関係している。ケニアのある女性は、「私の両親は以前、酒を飲んでいたので、子供達の世話をしませんでした。両親は私達を支えるのに必要なことは何1つできませんでした。私は1982年に結婚し、1987年に離婚しました。離婚したのは夫がアルコール中毒だったからです。彼は酒を買うお金を得るために家財を売り始めたのです。私達にはシャンバ(庭地)すらありませんでした。彼が物を売るのを私が止めようとすると、彼は私を殴りました。彼は私を追いかけてきたので、私はコロゴチョまで逃げて来たのです」と訴えた(Kenya 1996)。バングラデシュにおけるグループ討論で暴力問題が話題に上ると、「女性達は『声をひそめ、時には議論から暴力の問題を全く引っ込めてしまうこともあった』」(Bangladesh 1996)。

排除されている人々は誰か？

PPAは頻繁に、いくつかの特定のグループに対する社会からの排除について言及している。それぞれのグループがどのように排除されているかは各状況により異なる一方で、社会上の差異が、依然として排除の基礎であり続けている。これらの差異とは、特定の民族、性別、カースト、宗教、年齢層に属していることや、地理的に特定の地域に居住していること、或いは、なにかしらの身体的障害をもっていること、などである。我々は排除されているグループごとに別個の区分を設けたが、どのグループがどの社会で最も排除されやすいか、そして何から排除されるのかを一般化することは難しい。社会上の差異の様々な形態は、長年に渡って複雑に重なり合い、交差してきた。その中でも特に頻繁に排除の対象となるグループのいくつかが、以下に示されている。

女性

> *皆、自分の意見を口に出すことを許されています。しかし、私が自分の意見を述べると、多くの場合、言っている最中にさえぎられてしまうのです。*
> —南アフリカの貧しい女性, South Africa 1998

> *夫を失った女性、年老いて土地を耕すことが出来なくなった女性、子供のいない女性、自分の子供達から見捨てられた女性…。彼女達は最も弱い立場にいるのです。*
> —スワジランド・ルボンボで実施されたPPAの報告書より, Swaziland 1997

PPA調査の圧倒的大多数は、女性差別の現状を示す重要な例があり、これは、

女性達が、社会全体に広がっている排除を経験していることを提示している。排除の明確な特徴は各社会の文化によって形成されるが、PPAは次のような類似性を指摘している。

家庭内での女性のアイデンティティは、伝統的に母や妻としての役割が中心とされてきた。バングラデシュの女性は、自分達が「夫の助けの有無に拘わらず、物質面でも感情面でも、家族に食事の用意をしたり、子供の面倒を見なければならない義務」を有していると話している(Bangladesh 1996)。家族の世話人という、まず当然とされる女性の役割は、彼女達が公共の活動に参加することをさらに難しくしている。多くの社会において女性は財産所有や公共制度とのつながりから切り離されている。ウガンダでの女性だけの討論では「男に生まれて来たかった」と言った女性もいる(Uganda 1998)。また、ガーナのPPAは、「女性の伝統的な従属的地位が生産要素へのアクセスを狭めている。なぜなら、彼女達は土地を所有することができず、彼女達に与えられる小さな土地は、一般的に男性の取り分の残りであるからだ…。女性は中央から派遣された役人とほとんど接触がなく、世帯主が所有する道具や交通手段のわずかな余剰部分にアクセス出来るだけである」とも伝えている(Ghana 1995b)。

多くの場合、従来からの妻や母としての役割は不変であり、これらに当てはまらない女性は周囲から追放され、国の制度からは差別されてしまうことになる。ナイジェリアの3つの地域社会では、例えば「婚期を過ぎた独身女性、未婚の母親、そして不妊症の女性は、彼女達がこうなったのは彼女達自身のせいだと思っている年下の男女からよく辱められ、侮辱される。それ故、彼女達は一生汚名を着せられ、軽蔑されて生きていかねばならない。経済的には、こうした女性は生産基盤が弱いため、他の女性達と対等に競うことは出来ないとされている。例えば、このような女性達がビジネスを始めたり、自身の向上のために借金をする際、疑われる場合があると指摘されている。彼女達はまた、脅迫にも悩まされているのである」(Nigeria 1995)。

公的及び慣習的な低賃金労働市場における女性の役割の増加は、女性にとって新たな負担をもたらすと同時に、新たな機会をもたらしている。新たな収入源が、直接女性達の家庭内や地域社会における権限向上に結びつく訳では決してない。しかし、これら社会のもつ不平等や社会的束縛にもかかわらず、前章でも述べたように、自分を取り巻く環境に抵抗し、虐待が行われる家庭を離れ、時には陰に隠れて、時には堂々と表立って自分達の権利を主張する女性は存在するのである。

子供達

子供達は、制服や靴、ペンなどをせがんできます。私達のような他人のために労働する者は、稼いだお金で食料を手に入れるべきな

のでしょうか、それとも黒板を買うべきなのでしょうか。
—パキスタンの貧しい女性, Pakistan 1993

一体、僕に勉強する必要はあるのかな。僕は足し算や数の数え方を知っているよ。お金を数えることもできるし、ぼったくりもするし、ふっかけて騙すことだってできる。誰も僕が学校に通うためにお金を出してはくれないけど、僕は商売をして月に15～20ラリ稼いでいるよ。
—グルジアの10歳の商人, Georgia 1997

人は私が子供達を叩くことを非難します。しかし、子供達がお腹を空かせて泣いている時、私にどうしろと言うのですか。泣き止ませるためにはこうするしかないのです。
—アルメニアの貧しい母親, Armenia 1999

子供達は社会で最も脆弱なグループに属している。子供達は、自分達の生活を左右する社会の流れに対して、力や影響を与えることがほとんどできず、また虐待から身を守る力もほとんどない。トーゴでのPPAは、「この国の慣習法では、子供をその家族の所有物とみなし、個人としての権利を認めていない。労働搾取の慣行が非常に広く行き渡っていることや、少女の性器切除が実在する点は、子供達の脆弱性を示す最も極端な例の1つである」と報告している（Togo 1996）。基本的権利の欠如している中で、貧しい子供達が直面する問題としてPPAの調査で1番強く浮かび上がったのは、教育や医療機関からの隔絶、児童労働、虐待、ホームレスなどの問題である。

子供達は経済的・社会的要因の両方によって学校教育から締め出されている。ナイジェリアのある報告書が示しているように、少年達を退学させるという決断は、ほとんど全ての場合、経済的圧迫が理由となっている。「北東部で9人の子供（5人の少女と4人の少年）に話を聞いた。少年達は皆学校に行きたがっているが、彼らの両親は授業料を払う余裕がないために、学校に行かせようとしない」（Nigeria 1997）。同報告書では、少女達については経済的・社会的要因の両方により、教育を受ける機会を与えられてこなかった、と報告している。同様に、ベニンの田舎でも親達は「私達はなぜ娘達を学校に通わせないといけないのですか。1度結婚してしまえば彼女達は夫のものとなり、私達のものではなくなるのに」と述べている（Benin 1994）。

児童労働は、子供達が学校を辞めていくもう1つの原因である。貧しい家庭では、補完的な収入を得る必要性の方が、教育よりも優先されてしまう。「退学の主な原因が、収入を得る活動へ関与する必要性であることは、子供達の発言から明

らかである。例えば、エルサルバドルの農村地域に住んでいる14歳のある少年は、製塩工場で働くために学校を中退した。彼は真面目な生徒で学校がとても好きだったにもかかわらず、経済的な難しさと、少しでも家計に貢献する必要性から学校を辞めなければならなかった」(El Salvador 1997)。

子供達はただ働くだけでなく、しばしば最も危険な職種での労働を強いられている。その1つである児童売春は多くの国で報告されている。パナマでは、「12、13歳の少女達はもう大人の女性である。麻薬業者は彼女達に金を渡す。彼らは少女達の胸が成熟していることを知っているのだ…。そこで彼らは少女達に金をやり、食事に誘い、新品の靴を買い与える。…さらに15、16歳の少女は、しばしば男性に自分自身を差し出すさらに若い少女達を誘い込むのである」(Panama 1998)。このパナマの報告は、その地域社会に住む子供達の将来の行く末をこうまとめている。「少女達は果ては麻薬業者の愛人か売春婦となり、少年達は麻薬売買に手を染めていく」(Panama 1998)。

同様にベニンでは、「子供達は基本的に1人で独立しており、何の教育も受けておらず、目上の者に対する敬意もない。要するにストリートチルドレンとほとんど変わらない。彼らは毎食きちんと食べることができず、健康管理など問題外の話で、本当に服と呼べるようなものさえほとんど持っていない。少女達は売春で生計を立てるしか道がなく、14歳、中には12歳で始める少女さえいる。彼女達は50フラン、又は1回の夕食を手に入れるために売春をするのだ」(Benin 1994)。

インドの農村部で調査員は、オリッサ西部の干ばつになりやすい地域における、児童の拘束労働に関する例をいくつか報告している。インドのPPAは奴隷のような労働を強いられている16歳の少年について語っている。「パチャワックはある日先生にひどくムチで打たれたので、3組を飛び出した。その時から、彼は数々の裕福な家庭で児童労働者として働いている。パチャワックの父親は1.5エーカーの土地を所有し、労働者として働いている。彼の11歳の弟も、長男の結婚資金のために家族がお金を借りなければならなくなったため、奴隷労働者となった。この制度は、子供を借金のかた(クシャ)として預かる土地所有者から、多くの家族が借金をするという信用貸しと密接に関わっている。パチャワックは家畜の見張り番として朝6時から夕方6時まで働き、年に2～4袋の玄米、1日2回の食事、そしてルンギ(巻き付け式の衣類)1枚を給料としてもらった」(India 1998a)。

東欧や旧ソ連のような国々では、貧困の重圧が、学校で勉強するよりも通りで物乞いをすることへと子供達を導いている。マケドニアで、家計を助けている子供を持つある母親は「自分の2人の子供達は、毎日ごみの中からパンを集め、それを家畜を飼っている人々に売っている。この子供達は1日に100デナー稼いでいる」と述べた(Macedonia 1998)。グルジアの調査員は、教育を受けることをあきらめ

る子供の数が増加していると報告している。多くが自分達の両親と慣習的な形で、商売人、荷物の積み込み係、及びお手伝いとして働いている。中には重労働の手作業を行う子供もいる(Georgia 1997)。グルジアでは子供の病気やけがが驚くほど増加した。ある診療所の医師は、親達が病気の子供達のためにもっと乾燥した地域へ移住できないため、小児喘息患者が4倍に増加したと報告している。子供が大人の仕事をますます請け負っていくにつれて、けがの割合も増加してきた。「木を切ったり、燃料を集めたり、危険な灯油ストーブで調理をしたりと、大人の仕事を子供が請け負うようになった今、子供達は頻繁にけがや火傷の被害に遭っている」(Georgia 1997)。

最後に、ブラジルのPPA(Brazil 1995)は、多くのストリートチルドレンには家族がいて、孤児ではないことを明らかにした。極度の貧困、父親の不在、そして、何とか収入の範囲内で生活していこうとする母親の孤独な闘いが、お金を稼ぐために子供を外に追いやるのである。子供達は物売り、洗車中の見張り番、靴磨き、食料の運搬屋などとして働く。これらの子供達の内、犯罪行為に関わっているのはごくわずかである。しかし、彼らは虐待や嫌がらせに遭ったり、路上での孤独の中で、「家族」をつくる手段としてギャング集団に加わるよう圧力をかけられたりしている。このブラジルの報告は、ある極貧の子供の生活についての以下のように描写している。「彼はしばしば盗難の被害に遭ったり、大人や同年代の子供からの身体的暴力の犠牲者になっている。彼は孤独な状況の中、新しい家族をつくる方法としてギャング集団の一味になるかもしれない。嫌がらせをされたり、いじめを受ける可能性もあり、若者のギャングや犯罪者集団による犯罪行為に誘惑されることもあるかもしれない。麻薬という悪魔に囲まれて薬物乱用を始めるかもしれない。多くのストリートチルドレンは極めて低い自尊心しか持ち合わせておらず、これは生活の中で彼らが常に直面している、軽蔑やいじめの影響であることは明らかだ」(Brazil 1995)。南アフリカでは、子供のギャングによる接着剤の吸引、飲酒、及び薬物の乱用が報告されている。しかし、こうすることによって、「彼ら(子供達)は、やっと自分達の心の支えとなる集団の一員になれるのである」(South Africa 1998)。

子供達は多くの意味で、貧困に対処する能力が最も欠如していると言ってもよい。「貧困であることや生き抜くために闘うという、常に心にのしかかる精神的ストレスは多くの研究で明らかにされている。ストリートチルドレンにはこれが最も顕著に表れる。南アフリカの何人かの子供が描いた自画像の分析結果では、彼らの中にあるストレス、不安、心理的退行、そして社会との真のつながりの欠如が示されている」(South Africa 1998)。

南アフリカの国家制度は、貧しい子供達の問題に十分に対処してこなかった。子供達は物乞いや洗車をしたり、市の条例で認められていない方法で生計を立てなけ

ればならないことが多い。それに加え、ストリートチルドレンは司法制度から隔絶されており、認められている権利はほとんどない。南アフリカのPPAには、貧しい子供達は「児童保護法の下で見捨てられた子供として認められるよりも、刑事訴訟法により若年犯罪者として扱われる。子供達は警察官に暴行されたり、情報提供者として利用されたり、賄賂を渡すよう強いられた、と主張している」(South Africa 1998)。

貧しい人々

> *権力者には貧しい人々のことが目に入らないようです。全ての貧しい人々が軽蔑され、とりわけ貧困であることそのものが見下されているからです。*
> —ブラジルで実施されたPPAの報告書より, Brazil 1995

> *ひ弱そうな大家族の父親、そのような家庭出身の娘は、若くして結婚や妊娠をする傾向があり、たいていは生まれた子供を年老いた祖父母に残して去っていきます。*
> —ケニアのブシアで実施されたPPAの報告書より, Kenya 1996

社会的排除と貧困はそれぞれ別個の概念でありながら、深く密接に関わり合っている。本当に貧しい人々は、多少恵まれた状態にいる貧しい人々がもつ資源、機会、情報、そして人脈へのアクセスが無いために、貧困から抜け出すことが出来ずにいる。これは途上国の貧しい人々にとって、何世代にも渡って一族が貧困状態にあることを意味する。加えて、貧困は社会的不名誉だと非難される現実が、貧しい人々が生きていく上で必要なネットワークや資本へアクセスすることを、一層困難にしている。この悪循環を断ち切ることは難しい。

権力のある機関とのコネがないため、自らの権利、子供の奨学金及び収入に関し、貧しい人々が持てる情報には限りがある。アルメニアの現金不足の村では、自宅で出産する母親は、出生証明書の発行の際に請求されるごくわずかな料金を支払えないがために、児童扶助金が交付されずにいる。情報がなく、また外部からの信用が乏しいことが原因で、マケドニアの女性達は、貧しいにもかかわらず、子供達の奨学金や信用貸付へアクセスすることができない。仮に彼女達がアクセスしようしても、「コネのある人だけ」にしか、サービスは提供されない(Macedonia 1998)。

貧困は、痛ましく恥辱的な汚名と無力さを伴う。ラトビアのPPAのある女性回答者は、最後の子供が難産で、出産後しばらくは病院に入院していた。「彼女の夫はその時失業中だった。彼女は退院した時、20ラット以上の医療費を請求され、その額は家族の貯金全額だった。彼女達には、地方自治体から医療費を払い戻してもらえる権利が法律上認められている、と病院側は説明し、領収書を渡した。

数日後、彼女はお金を払い戻してもらうために自治体の役所に行った。しかし、担当の役人は取り扱うことを拒否し、彼女の領収書を彼女に投げつけ、『お前はもう自分で支払ったじゃないか』、と言った。これ以上何の説明もされず、結局払い戻しはされなかった」(Latvia 1998)。

規範やネットワークが、人々に社会の中での居場所や自尊心を守り、また地元の資源やセーフティネットへのアクセスを与えるため、社会ネットワークから切り離されたり、社会規範に応じることができずにいることは、貧しい人々にとって究極的に耐え難く、恥辱的なことである。人々は、重要な社会活動から排除されるくらいなら、むしろ借金を重ねていく方を好む。「儀式では伝統的に、客は贈り物か現金を持参するという重要な義務を課されている。今では貧しいモルドバ人は、ふさわしい衣服や贈り物を買うお金がないという理由でこのような招待を断るか、或いは客としての義務を果たすために借金をするかの選択を余儀なくされるようになった、と話す。ウンゲニ出身のある男性は昨秋、結婚式への招待をいくつか断らなければならなかった。それは今までの人生で1度もしたことのないことだったと彼は言っている。しかし、姪の結婚式への出席を断るのは不名誉なことになる思ったため、彼は結婚祝の贈り物のために35レイを借りた」(Moldova 1997)。

同様にベニンでは、「葬儀用の資金を取っておくために、父親を見殺しにした男性の事例があった。彼はその資金で父親を医者に連れて行くこともできたのだが、立派な葬儀ができなくなるからと、そうしなかった。彼は、誰かがある日彼を訪れて、『父親が死んだ時、君は何をしてあげられたんだ』と尋ねられたらどうしようかと、とても恐れていたからだ」(Benin 1994)。

高齢者

> *私がここに横たわって死んだとしても、大した問題にはなりません。なぜなら、誰も私を必要としていないからです。今こうやって、自分の無力さ、必要性の無さ、誰からも保護されていないと感じていることが、私にとって最もつらいことなんです。*
> —ウクライナの高齢の女性, Ukraine 1996

> *私を引き取ってくれるよう高齢者用施設に頼んでください。こんな風に家族に迷惑をかけながら暮らしたくはありません。高齢者用施設では私が年寄りだといって責める人はいません。誰かに助けてもらうのはもうたくさんです。*
> —アルメニアの高齢の女性, Armenia 1995

> *私は、もう年寄りで働くことができない、だから貧乏なのです。私の土地*

はやせてしまったので、どうにか耕しても、充分な収穫にはなりません。
—トーゴの年老いた男性，Togo 1996

高齢者への待遇は文化によって様々である。アジア、サハラ以南のアフリカ、ラテンアメリカ及びカリブ海地域のほとんどの国では、高齢者は尊敬と敬意をもって扱われる。しかしながら他の文化圏、特に高齢者福祉の責任は国家にあると考えられている東欧や旧ソ連では、人々の生きるための必死な闘いの中、多くの高齢者は、排除される立場に追いやられている。ここ10年の社会的セーフティネットの崩壊により、高齢者は極端に弱い立場に立たされている。アジャラに住むある回答者は「10年後には、年金生活者は、誰1人生きていないでしょう」と述べている（Georgia 1997）。高齢者の脆弱性は、社会崩壊の早まりと共に一層ひどくなってきた。かつては定年後の身の安心を期待できた高齢者も、今では、自らの立場を絶望視している。「私はこの人生ずっと働き続けて来ました。42年間、私は正式に雇われた社員でした。夫と私が今まで何かを我慢しなければならなかったことなどありません。私達には並外れた貯蓄があり、平穏に暮らしていました。高齢になった時子供がいなくても十分にやっていけるだろうと思っていました。病気になったり何かあった時には介護人や看護婦を雇うお金はあると思っていましたし、食事、医療、私の葬式、その他に使うお金はあるだろうと思っていました。しかし今、私は乞食をしています。私には何もありません」とウクライナの女性は話す（Ukraine 1996）。孤立や地位の喪失、無力さは、高齢者から報告されている多くの経験に映し出されている。アルメニアでは、ある高齢の女性が昔を思い返して次のように語っている。

主人は随分前に亡くなりました。私達には子供がいませんでした。で私は線路の監視員としてバクーで40年間働きました。私の妹はスムガイト（アゼルバイジャンの工業都市で、1988年の2～3月にかけての反アルメニア抗争のあった場所）で殺されました。彼女の子供達はロシアに行きましたが、ロシアのどこに行ったのか、はっきりとはわかりません。私達はエレバンまで来て、そこからバスでこの土地までやって来たのです。（民営化後）私は近所の住人に土地を譲りました。彼がその土地を耕し、小麦粉を2袋（100kg）くれるというので合意しました。秋が来て、私は彼のところへ行ったのですが、彼は約束の小麦粉を何度も先延ばしにしました。私は10日間パンなしで過ごしました。おそらく他の隣人が彼に何か言ったのでしょう、結局彼は私に同情し、2袋の大麦をくれました。これは食べられた代物ではありませんでしたが、私にどうし

ろというのでしょう。このようにして生きて行きたくはありません。私が通りに出て行くと、子供達は私に向かって「乞食がいるぞ！」と叫びます。明らかに、子供達は大人を真似て覚えたのです。私にはアショットというとても親切な隣人が1人います。彼は全てにおいて私を助けてくれます。彼は私の菜園に種を蒔き、収穫して、私にくれるのです。しかし、今彼は移住を望んでいます。彼がいなくなったら、私はどうやって生きていけばいいのでしょう。私はアショットと村長に私を高齢者用施設に入れてくれるように頼みました。「ビオレッタおばさん、何でそんな所に行かなくてはならないの」と彼らは言います。私はたくさんの人を助けています。彼らに毛布やマットレスを縫ってあげて、ハイクから私に会いに来た人もいます。ある朝起きてみると、食べる物が何もありませんでした。誰かが何かを持ってきてくれるのを期待して待っているのは耐えがたく、私の死のことで誰かが責められることのないように書置きして、私は崖から飛び降りる決心をしました。その道の途中、隣村の村長に偶然出会いました。私は我慢できず、泣き出してしまいました。彼は私をなだめてくれ、それにはとても感謝しています。家に帰るよう私を説得してくれました。私は他人を責めているのではありません。アショットは私を助けてくれますが、その彼さえももうすぐ去ってしまうのです。エレバンには高齢者用施設があると聞いています。そこの人達に、私を引き取ってくれるよう頼んでください。こんな風に他人に迷惑をかけながら暮らしたくはありません。高齢者用施設では私が年寄りだといって責める人はいません。誰かに助けてもらうのはもうたくさんです。

—アルメニアで実施されたPPAの報告書より，Armenia 1995

何とか生きていくために、ラトビアなど東欧や旧ソ連諸国の年老いた年金生活者は、出費を抑えようと生命保険を解約する（Latvia 1998）。モルドバでは、上昇し続ける医療費が原因で、高齢の貧しい人々は「年をとったら避けられないものだとか、数少ない資源や自分達よりも若い家族のニーズを考慮して、自らの生活はそんなに重要ではないと解釈して、自分達の病気を無視する傾向がある」（Moldova 1997）。

ベトナムで貧しい人々とされている主なグループの1つが高齢者で、中でも病気であったり、独り暮らしで自らの子供も貧しい人々が、貧しいと認識されている。貧困の度合いを示す重要な指針である貯蓄の不足は、子供の稼ぎを頼りにできない高齢者の間でとりわけ顕著であり、そのため彼らは、貸付業務を行う側からはリスクであると考えられている。ベトナムの信用貸付を行う女性団体のリーダーは、

「我々は彼らに貸付はできません。なぜなら彼らが死んだ場合、貸した金を回収できませんから」と述べている（Vietnam 1999a）。自らの老後、貧困と戦っている子供達の重荷になりたくないという貧しい人々の強い望みは、多くの場所で明らかになってきている。「私達は死んだも同然です。なぜなら自分自身のために望むものは何もないからです。私達はただ、子供達が貧しくならないことだけを望んでいます」（Vietnam 1999a）。エクアドルのシエラの地域社会では、高齢者、未亡人、その他の独り残された人達は、自分達の土地資源を有効活用できないがために、最も貧しい人々として認識されている（Ecuador 1996a）。経済的圧迫と家族の団結の崩壊がますます進む中で、サハラ以南のアフリカやアジア諸国では、排除される貧しい人々の新しい区分に、高齢者が挙げられている。社会ネットワークが重要視されている場所では、最も脆弱な人々は物乞いをせざるを得ないのである。マダガスカルでは、「物乞いをするのは主として社会集団に適合しない人々、つまり離婚した女性、未亡人、高齢者、障害者、そして子供のいない人達である」（Madagascar 1996）。

民族集団

> *皆が仮に学校に通い始めることが出来たとしても、退学者のほとんどは先住民族の子供達になるでしょう。*
> —ベトナムで実施されたPPAの報告書より，Vietnam 1999a

> *彼らはいつも私達マヤ族を締め出し、差別してきました。彼らは木は切り落としはしましたが、その根を引き抜くのを忘れたのです。その木は今また成長し始めています。*
> —グアテマラで実施されたPPAの報告書より，Guatemala 1997a

民族に基づく社会排除は、PPA全体を通して見られる共通の問題である。多民族社会における力関係とは、常に他の集団の犠牲のもと、特定の集団を優遇するものである。インドでは、民族に基づく排除は厳しいカースト制度によって維持されている。「Gandas of Khairmalの観察によれば、学校のような公共施設においてでさえ、ガンダ族の子供達は他の子供達から離れたところに座って昼食を取るという。あるアンガンワディ族の労働者は、ガンダ族の男児が触った食器を洗いたくない、またガンダ族の子供の世話をしたくないという理由で仕事を辞めなければならなくなった。不可触せん民として扱う慣習は他の村からも報告されている」（India 1998b）。

社会の主流から追いやられる現象は、地理学的に見られる場合もある。例えばインドでは、土着のアディバシ部族の人々は、荒れ果てた森林、侵食された丘斜面、雑木の生えた土地や岩の多い土地へとカーストの入植者によって追いやら

れた。彼らは他の部族のための農業労働力となったり、急速に失われつつある共有の財産資源を奪ったりしているのである(India 1998b)。

ウガンダでは「ある地域社会で村の社会学的地図を作成後、我々調査団は、その地域社会がどのような未来像を持っているのか知りたくなった。ある参加者はバツワという少数民族の貧困状況を何とかしなければならないと提案した。ここで初めて、地域社会が作成した地図にはバツワ族の世帯が全く入っていないという点に気づいた。さらに悪いことに、この小さな民族集団の中から誰1人としてその集会に参加していなかった。調査団は別個の取り組みとして、バツワ族の家族に聞き取り調査を行うことを決め、近隣に住む女性2人を見つけた。そのうちの1人が状況をこうまとめている。『私達はバヒュンビラ族の農園で働いている時にだけ、価値があるもとして彼らの目にとまるのです。それ以外の場合には彼らの目に私達は写ってはいないのです』」(Uganda 1998)。

民族に基づく社会からの排除は、資源が誰の手に渡っているのかを理解する鍵となる。フィリピンでは、政府の農村開発計画による恩恵を最も受けていないのは先住民族であった。「起伏した山の多い地域に多く住む先住民族は、劣等感を訴えている」(Philippines 1998)。ベトナムでも、民族に対する配慮の差は教育へのアクセスを左右する鍵となっている。「その地域では2人のチャオ・マ族の子供が学校に通っているが、彼らは学校に行きたがらない。キン族の子供がいじめるからである。先生はいるが、ほとんどがベトナム語しか話せない。キン族の子供の就学率は、他民族の子供よりもずっと高い。仮に皆が学校に通い始めたとしても、退学者のほとんどは先住民族の子供になるだろう。出席率の低さの原因は様々であるが、最も一般的なのは、家庭で必要とされる子供の労働力、通学距離のながいこと、道がないこと、水辺を通る際の危険性、不十分な本や服、ベトナム語が分からないこと、キン族の子供に歓迎されないことなどである」(Vietnam 1999a)。

HIV/エイズ感染者

> *エイズ感染者は非常に苦しんでいます。なぜなら周りの人々がその人を恐れるため、他人との意思疎通ができなくなり、結局友人を失い、そのまま生涯を終えることになるからです*
> —南アフリカで実施されたPPAの報告書による，South Africa 1998

> *エイズに国境はありません。*
> —ウガンダで実施されたPPAの報告書より，Uganda 1998

エイズを取り巻く様々な迷信と固定観念により、エイズ感染者は、貧しい人々が生きていく上で欠かせない財産である社会ネットワークから切り離されてきた。

HIV/エイズ感染者に対する固定観念は、文化によって大きく異なる。東ヨーロッパや旧ソ連では、HIV/エイズ感染を麻薬の常習や同性愛嗜好と否定的な関連付けがされ、感染者は差別されてきた。サハラ以南のアフリカでは、エイズは売春婦、女性、トラック運転手や貧しい人々がかかる病気であるとされている。

HIV/エイズ感染者にとって致命的な問題は、羞恥心、拒絶、社会的隔離、そして発病後に心理的・物理的に闘うために必要な社会ネットワークへのアクセスを失うことである。南アフリカの貧しい人々によると「HIV/エイズに対して多くの人々がもつ恐怖感は、感染していることが公になったら、家庭や個人が社会から隔離されてしまうであろうという恐怖心である。…そのため、多くの人々が感染という事実を隠し、今後の公共教育でこの問題を明らかにしていこうとする取り組みを妨げることとなる」という(South Africa 1998)。また、病気に対する恐れから、「病状をなかったことにして放っておけば、病気はそのうちに消えるだろう」という、誤った姿勢が広まることにもなる。特に、HIV/エイズは死や孤児、貧困と密接に関わるためなおさらである(Uganda 1998)。南アフリカでは、医療サービスを提供する側の振舞い、つまりHIV/エイズ患者に対する診療所の職員の「無礼で道徳主義的な態度」は、貧しい人々から、最低限必要なサービスを求めようとする意欲を失わせるという(South Africa 1998)。

エイズは個人の問題にとどまらない。家族全体が孤立してしまう可能性があるからである。ブルキナファソでは、以下の報告がなされている。

> *エイズで夫を亡くした未亡人達は、自分達の村から子供達と一緒に追いたてられてしまった。彼らは何も持たずに、知り合いもほとんどなく、仕事を求め、やっとの思いで町にたどり着いた。彼女達は第24セクターの施設(Delwende de Taughinセンター)にいる、年配の女性達と同様の汚名を着せられている。説明することができないとされているような夫の死により、彼女らは皆、魔女だと罵られ、村から追い出されたのである。この新しいタイプの若いホームレスの女性達は、表面上は健康そうに見えた若い夫の死について、非難されるのである。このような若い女性と年配の女性との違い、またこの若い女性達が農村よりも都会で、社会的により弱い立場に立たされてしまうのは、おそらく彼女達自身がエイズに感染している危険性があることであろう。更に、この若い未亡人達は1人で町に出て来るのではない。仕事を探すことも、協力し合って生き延びていくことも出来ないくらい幼い子供を連れているのである。今後エイズ感染者が増加するにつれ、社会的に排除されたこのような女性の数も増え続けるであろう。*
>
> —ブルキナファソで実施されたPPAの報告書より, Burkina Faso 1994

HIV/エイズ問題と家族や社会にもたらす深刻な状況は、ベニン、ブルキナファソ、カメルーン、エチオピア、マリ、セネガル、南アフリカ、スワジランド、タンザニア、トーゴ、ウガンダやザンビアを含むサハラ以南のアフリカで実施されたほとんどのPPA報告で議論され、タイやカンボジアにおいても問題とされている（HIV/エイズに関するPPAの報告については、第3章の事例研究3.1において、追加的に述べられている）。

身体障害者

> *体の不自由な子供は人間として見られません。彼らは家で隔離され、学校へも行かせてもらえないのです。*
> —ウガンダ・カバレ（Kabale）における特定の調査対象グループ，Uganda 1998

身体の障害は、極めて貧しい状況にいる人々を表す特徴の1つとしてしばしば報告されている。そして身体の障害により、物理的・社会的な場へのアクセスの問題が生じている。モルドバのティラスポルに住むある盲目の女性は「貧しい人にとっては病気、屈辱、羞恥など、全てひどい状況にあります。私達は身体障害者なので、何もかもが恐ろしく感じられます。私達は皆に頼るしかありませんが、誰からも必要とはされていないのです。私達は誰もが捨てたいと思う、ゴミのような存在なのです」と報告している（Moldova 1997）。高い医療費は身体の障害を悪化させている。報告は以下のように続く。「困窮の崖っぷちに追いやられていたり、既に借金を抱えている家庭の場合、自分達が慢性疾患や重病にかかっていても、対応できないということが頻繁におこる。マリアは最近、胸にいくつかのしこりを発見した。彼女は自分が癌に侵されているかもしれないと気付きながら、すでに夫の治療費の支払いに多額の借金を背負っていたため、医者に診てもらうことを拒んだ」という。モルドバのバルティ地方に住むある体の不自由な男性は、自分の妻について、「妻はひどく肝臓を患っています。私が医者へ行けと言っても、妻は聞き入れません。彼女は金を支払うことを恐れているのです」と述べている。たとえ貧しい人々が何らかの治療を受け始めたとしても、治療が完了するまでの代金が支払えないこともある。ある女性によると、彼女は肺炎にかかってしまい、10回分のペニシリンを買うための金を借りたが、10本目の注射器を買う余裕がなかったので、9回しか注射しなかった、と報告している（Moldova 1997）。

身体障害者に対する社会的排除は、彼らに対する基本的な経済的配慮がなされた後も、なくなることはない。

地震が起きる以前は、アルメニアの人々は生まれながらの欠陥や障害を恥ずべきものとしていたため、障害者の扱いにあまり慣れておらず、時には拒絶感をあらわにするほどだった。家族は、障害を持つ子供を家に隔離し、他の健康な子供達の結婚のチャンスを逃さないようにしていた。地震以来、かなりの援助が身体障害者に行き渡った。ギウムリのオーストリア人居住区では、身体障害者は、健常者である親戚や保護者と共に、電気や調理用ガス設備のある100世帯の身体障害者向け専用アパートに住んできた。こうした身体障害者には、ヨーロッパ諸国から金銭や服、休日のための小遣いまで送ってくれる支援者がついている。それでもなお、身体障害者は隔離されたままである。特別な交通手段が欠如しているため、行動範囲も周辺近所、養護学校、小さな教会、地元の総合病院、小さな店というように限られている。地震があった地区で、近親を失ったり、家が壊れたままで修理しなければならない状況にいる健常者は、自分達は身体障害者と全く同じだけ被害に遭っているにもかかわらず、「全ての援助」が「身体障害者」のもとへ流れていくことを不平等だと感じている。その結果、身体障害者が周辺の町からギウムリに入ってくると、彼らは名前を罵られたり、敵意の餌食になってしまう。
—アルメニアで実施されたPPAの報告書より，Armenia 1995

未亡人

未亡人は、まだ死んだ夫の葬式を済ませていないにも拘わらず、財産を乗っ取ろうとする親戚に虐待されます。こうした親戚の中には子供もいます。
—ウガンダ・ムバララにおける特別調査グループ，Uganda 1998

当初我々は、事例研究を進める上で、未亡人を社会から排除される集団と位置づけて分析していたわけではなかった。しかし、データは、多くの貧しい人々の文化において、未亡人は社会的には死んだに等しい身分とされていることを提示している。未亡人は死や悪運の兆候のように見られ、重荷であり、役に立たない手頃な獲物とみなされ、しばしば貧しい人々の中でも最も貧しい立場にいると認識されている。スワジランドの女性達によると、未亡人達を悪運の兆候とみなし、長期に渡る喪の期間中は社会から隔離するというスワジランド文化により、彼女達の環境は一層困難なものとなっている、とのことである（Swaziland 1997）。社会的偏見や血縁関係の習慣、国家制度の責任感のなさが一体となって、未亡人を

社会からの排除や貧困という大きなリスクに直面させている（事例研究6.2参照）。

結論

多くの国々の貧しい男女は、自分達は以前にも増して社会から排除され、保護されていないと感じている。伝統的ネットワークを基盤とした従来の協力体系が、すさまじい速さで消滅しているという事実が、社会秩序の崩壊に一層拍車をかけている。貧しい人々は地域社会の消滅について言及している。というのも、かつては地域社会が、彼ら自身では変えることの出来ない、遠い存在であった国の制度からの援助不足を、部分的ではあるが補ってくれていたからである。いくつかの地域では、自衛手段として、地域社会の結束が強くなったといえる。しかし、お金で動かすことが出来るような警察や司法、犯罪と密接に結びついた腐敗した国家制度を変革するどころか、それに立ち向かうことは不可能である。このような状況では、貧困から抜け出したくとも個人の意思や努力ではどうにもならない。それ故に多くの貧しい人々にとって、人的資本に対して投資を増やすことが利益を生むとは到底思えないのだ。メキシコ（Mexico 1995）、ラトビア（Latvia 1998）、及びベトナム（Vietnam 1999a）の子供達は、貧困から抜け出すことは、学校での勉強や一生懸命に働くこととは何の関係もないと勝手に断言している。

多くの脆弱な集団、すなわち高齢者、HIV/エイズ感染者、未亡人、様々な意味での女性一般にとって、この10年間に渡る変化は、大切な社会のセーフティネットや習慣を消滅させた。1度貧困や社会的排除の悪循環に陥ってしまうと、貧しい人々は、情報、仕事、教育、医療保健、市場、年金、そして他の資源へアクセスする機会も持てぬまま、生き延びるために苦しむことになる。国家のあり方が、現在の社会の緊迫した状況や社会的断絶を悪化させ、貧しい者と富める者との不平等をよりひどいものにしているのである（付録7 表6.1参照）。

事例研究6.1　貧しい人々と警察

中央政府の統制が徐々に緩和されるにつれ、警察の機能も幾分か縮小された。しかし、同時に、警察に対する中央政府の監視が弱まることにもなった。そのため、多くの人々は警察に対してひどい恐怖心を抱いている。中央政府の統制が緩和したことで、特に貧しく、社会的弱者である市民は、警察に対して自分達は無防備であると感じているのだ。警察はあてにできず、逆に賄賂を要求したり暴力で脅迫してくる警察官に対して、貧しく、弱い市民はその要求に応

じるしかない。

—ウクライナで実施されたPPAの報告書より，Ukraine 1996

ゲルズとストラウスの研究によれば、警察権力の機能不全は、社会的結束や信頼の低下と、無秩序、犯罪及び暴力の増加に大きく関与している。汚職、機能不全の制度及び社会崩壊は、警察に対する態度に浮き彫りにされている。警察は社会における最も抑圧的な3組織の中の1つに挙げられている（残り2つは、軍隊と家庭である）（Gelles and Straus 1988）。警察業務に対する制度上の抑制と均衡が失われたとき、警察の権力は、限りない抑圧と搾取の温床になり得る。

もちろん、この抑圧が導き出す結果は、状況によって異なり、本質的にはそれまで警察がどの程度社会と関わりを持っていたかによる。例えば、旧ソ連諸国は、広範な監視活動に重点を置いた警察システムが特徴的であった。ウクライナの報告書には以下のように説明されている。

警察に対する認識と警察と、犯罪や法の執行との関係について議論するのであれば、旧ソ連警察は、犯罪の撲滅に努めるよりも、市民を監視・統制し、秩序を維持するという任務を国家から課されていたという点が、指摘されなければならない。旧ソビエト国民は、警察を通じてプロピスカと呼ばれる登録証を入手していた。市民に仕事があり、登録されている場所に在住していることを確認したり、現在も公的身分証として使用されている国内用パスポートに結婚や離婚の登録をするのは、民兵の果たすべき役割であった。また、市民は出国用パスポートや査証の登録も警察を通じて行っていた。

—ウクライナで実施されたPPAの報告書より，Ukraine 1996

世界中で、警察の機能は、様々な理由で社会に浸透している。例えば、麻薬撲滅への取り組みや、テロや反民主主義的武装勢力の取り締まりなどである。地域社会における警察の強力な存在感は、極めて多大な影響力を持つ。例えばジャマイカでは、犯罪撲滅を目的とした特殊部隊の設置は、社会の緊張を大いに高めた。

警察は、都市部の貧しい人々にとって、日常生活の中心であるが、恐怖と社会不和に基づいている現存の構造を一層強化していくものと捉えられている。反犯罪部隊（ACID）や「ねずみ狩り」（軍と警察による合同パトロール）の活動は、特に、無差別に迫害の対象となっていると感じている若者から、残忍で人々を恐怖に陥れる行為

であると指摘された。
—ジャマイカで実施されたPPAの報告書より，Jamaica 1997

南アフリカの警察は歴史的に、抑圧を行ってきた少数の権力者と手を結んできたため、その他の大多数の国民と警察との関係は極めて希薄である（South Africa 1998）。南アジアの殆どの国々では、警察は腐敗した政治家と関係を持ち、貧しい人々の間では尊敬よりも恐怖心を抱かせる存在となっている。

警察の活動

警察は、ただ自分の影をちらつかせることによって、自分達の家族を守っているのです。
—アルメニア・アクリア（Akhuria）のある住民，Armenia 1995

警察は、その存在だけで恐怖の影を投げかけることができるので、人々は彼らの干渉を逃れるための予防策として、進んでカネを払う。支配し、脅し、恐怖心を煽り、賄賂を要求するという警察の力は、警察自体を監視する機能がない環境で広がっている。調査された報告書の約40％に、警察に関する記述がある。その中に、警察活動を前向きに評価しているものは1つもない。警察業務に対する評価は、最も肯定的な場合でも警察業務が「ほとんど機能していない」というもので、最悪の場合、警察は積極的に人々に嫌がらせをし、抑圧し、暴力を振るうと報告されている。ジャマイカ、ウガンダ、インド、及びモルドバといった全く異なる国々でも、警察の残忍な行為は、貧しい人々が直面する深刻な問題の1つとして、言及されている。

警察の無関心さは、特に東ヨーロッパや旧ソ連で顕著である。ウクライナの次のような事例に見られる通り、警察の業務が市民の期待とほとんど一致しないため、警察は市民に対して無関心なのだとみなされている。ローザという名の老婦人によると、隣人のアラブ人が、武装した男に恐喝され、暴行を加えられていたので、彼女は警察に電話で通報した。ところが、警察は、ガソリンが足りないので、現場に向かうことができないと主張したのである。しかし、ローザの指摘によれば、警察署はこの事件現場からたった200mしか離れていなかった（Ukraine 1996）。

このような警察の無関心さは、女性への暴力に対処する場合に、特に顕著である。南アフリカのレイプの被害者は次のように報告している。「警察ですらレイプに対して何の対処もしてくれません。私達が事件を通報すると、警察はその加害者によってレイプされた他の被害者全員の名前をもって戻って来い、と必ず言い、その証拠を基に、初めて警察はその人が本当にレイプ犯かどうかわかるのだ、と言うの

です。私が何をしてレイプされたのか、レイプ犯を誘惑したのではないか、その時どんな服を着ていたのか、といったことを聞いてきます。警察は何か助けてくれるわけではなく、単にこのような質問をしてくるだけです」(South Africa 1998)。

適切な治安と司法の確立に対する大きな障害として、こうした警察の無関心という問題と並んで挙げられるのが、警察官の汚職である。マダガスカルでは、正義の監視者たるべき警察と裁判官が、最も腐敗しているとみられている(Madagascar 1994)。警察の腐敗の影響は状況によって大きく異なるものの、腐敗それ自体に永続性があるため、ある特定の地域社会では、腐敗が蔓延することもある。

多くのPPAによると、商人や小規模取引業者の業務、それも特に女性を、警察が苦しめており、インフォーマルセクターでの生存戦略がますます困難になっているのは、警察に責任があるとされている。商人や売店の店主から賄賂をもらうために、商売禁止区域をパトロールしている警察を避けようと、インフォーマルセクターで行商をしている女性達は、常に場所を移ることになるのだ。このような賄賂の存在は、世界中の多くのPPAで報告されている。例えばカメルーンでは、「農作物を扱う商売人は、たとえどんなに道が整備されていても、数えきれないほどの道路封鎖や警察の妨害、税関の検査ポイントがあるため、『旅はまさしく悪夢です』、と述べている」(Cameroon 1995)。

グルジアでは、賄賂は、フォーマル及びインフォーマルセクターの両方の商業活動において横行している。零細企業経営者は、警察を含むすべての役人から賄賂を要求され、その上、組織犯罪によるゆすりの被害に直面している。起業家達は、「突然の事故」から自らを守り、生き残るための唯一の方法は、クリシャという用心棒を雇い、警察内部の権力者と良い関係を持ち、またこの自衛策を外の人達に公言することだ、と述べている(Georgia 1997)。警察の行動が、無関心・怠慢から汚職にまで及ぶ中、貧しい人々に影響を与える最もひどい不正は、個人に対する警察による暴力である。例えば、不審な「コーカサス国籍の者」と見なされて、モスクワ警察から暴行を受けた事例や、最悪な場合には「棺に入れられて返される」こともある(Georgia 1997)。

特に少数民族や社会的に排除された集団は、警察の搾取や迫害に対して脆弱である。パキスタンで調査員は、貧しい人々が直面している不安の極端な例を、カラチにあるレマナバッダというベンガル人社会で目の当たりにした。「彼らは以前から立ち退かされたり、脅されたりしてきた。居住地に戻って、アシやわらを編んで一時的な住居を作っている際にも、土地管理人、警察、そして政治活動家からの迫害を受けたのだ」(Pakistan 1993)。同様に、バングラデシュの民族集団は、警察に問題を訴えることをやめてしまった。なぜなら、彼らの訴えに対して警察は何の行動も起こさず、むしろさらにひどい嫌がらせに遭うだけだということに気

付いたからである(Bangladesh 1996)。グルジアの国内難民達(IDP)は、物乞いのレッテルを貼られ、その恥ずかしさに苦しむだけでなく、土地を所有していても、他の誰よりも家畜が頻繁に盗まれ、警察はそれに対してまったく無関心である、と報告している(Georgia 1997)。

問題に対処するための戦略

正規の国家が弱体化するにつれて、地方自治体はますます、独断で、とがめられることなく、権力を行使することが出来るようになってきている。警察のひいきにあやかることが出来る貧しい人々は、そのような支援を得ることが出来ない人々より、物質的に豊かな暮らしをしていると、インドの貧しい人々は話す(India 1998d)。報告書では、ある2つの警察業務に相対する2つの対処の手段が指摘された。その機能とは、正義を維持し、一般市民を保護する、ということである。

正義の欠如への対処

多くの国々では、警察権力は比較的新しい現象であり、正式に警察が活動する以前から、秩序を維持するための多様な社会的メカニズムが存在している。例えばインドでは、村内の口論や争いは、ムキアと呼ばれる村長と他の村人4人の村人によって組織された、パンチと呼ばれるインフォーマルな委員会によって解決されている。権利を侵害された側も、この委員会の決定を尊重し、ここでの決定が警察に報告されたり、裁判所に報告されたりすることは、めったにないのである(India 1997a)。

インフォーマルな形態の司法制度には、伝統的な流れに則したものもある。また他の事例では、人民裁判所が設置されているところもある。これらの裁判所は以前に比べて民主的になってはいるが、だからといって、抑圧や不正が全くないという保障は必ずしもない。ジャマイカのPPAによると、貧しい地域社会におけるインフォーマルな司法制度は、法と秩序の欠如に対処するものとして発展してきた。このような代替システムは、協議会や委員会を形成している構造が主に階層主義的であり、暫定グループでさえ、首長や権力を持つ指導者によって構成され、司法をインフォーマルな形で実施しているのである。例えば、あるコカイン常用者は袋叩きにされた後、その地域から追放され、別の幼児虐待の容疑者は「人々によって裁かれた」結果、地域社会から強制退去させられた(Jamaica 1997)。これら2つの事例における司法のメカニズムはどちらも理想的とは言えない。このように、制度が危機的状況下に陥ったときには、ある特定の集団が「裁判官・陪審員・執行人」の全ての役割を演じかねない。これは、特に権力の無い者達にとって、非常に危険な状況なのである。

治安の悪化への対処

制度や機構が崩壊する時、より多くの権力や資産を持つ人々は、それらを持ち合わせていない人々よりも、うまく警察の注意を惹くことが出来る。権力を持つ人々が求めているような保護を、警察が提供しなかったり、もしくは出来ないと、彼らは自分達で解決方法を探る。例えばウクライナでは、警察は市民や私財を保護することに消極的か、或いはその能力がないため、実業家達はボディーガードを雇わざるをえないとしばしば感じている。その結果、警察と商売上の利権の間に相互依存の関係が生まれるのである。地元の「マフィア」(民族的或いは地元の暴力団、組織犯罪、腐敗した政府機関を含む)は法執行機関にも広く顔が利き、マフィアの犯す犯罪は警察の了解と保護の下で行われている、と多くの人々は感じている(Ukraine 1996)。警察とフォーマルセクターにおける商売との癒着があるために、インフォーマルセクターで商売を営んでいる人々に対し、警察が嫌がらせを行っている、としばしば報告されている。

更なる身の安全を確保するための資金がない人々は、より包括的な保護を得ようと、力を合わせる場合がある。牛泥棒がはびこっているにも関わらず、警察の存在が弱いタンザニアの村では、村人が団結し、シュングシュングという地域内の自衛組織を形成している。この村では、20歳以上の男女全員がこの組織に参加することになっている。若い男性は警備の責任を負い、夜になると、人々がうろついていないか確認するため村をパトロールする。女性は交代で、警備員達のために食事の用意をする(Tanzania 1997)。同様に、グルジアの田舎では、家畜や収穫物を狙った泥棒が頻繁に現れるので、収穫期前になると、農民は交代で農場の監視を行う。彼らは、夜、武装した泥棒と遭遇したこともあったという(Georgia 1997)。

警察による保護が金で買えるとなると、都会のスラム街で暮らす貧しい人々は、腐敗した警察、又はスラムの悪徳家主か暴力団という2つの悪魔の策略にかかってしまう。バングラデシュのスラム住民は、自分達には裁判所からの援助が欠如している点を指摘している。チッタゴンとダッカのスラムに住む男性達はそれぞれ、暴力団員達が10代の少女に定期的に嫌がらせをし、時には誘拐してレイプすることもある、と報告している。暴力団員達はスラム住民に金を要求し、もし文句を行ったら、家を燃やすぞ、と脅すのである(Bangladesh 1996)。

貧しい人々への影響

警察官はパトロールをすることができません。彼らは腐敗しているからです。

—パナマで実施されたPPAの報告書より，Panama 1998

警察の業務が不十分であることが原因で、人々の警察に対する信頼が失われると、この不信が結果的に警察の質と評判をさらに悪化させることになる。しかし、警察の腐敗によって、これをはるかに上回る悪い結果がもたらされている点も、強調されなければならない。全地域を網羅した報告書の多くは、集団と個人の間で信用が失われているのは、警察権力の脆弱化とそれに伴って犯罪が増加した結果である、としている。警察への不信感は、地域社会或いは集団間の将来的な協力体制を損ねることになる。地域社会の仲間の信用なしに、状況が好転することは期待できない。例えばジャマイカでは、調査を実施した既存の地域社会の制度は、暴力の鎮圧に失敗しており、多くの場合制度が空洞化しているとPPAは指摘している。従って、暴力の統制と鎮圧を可能にする唯一のメカニズムは、警察による残虐行為や人権侵害を広く取り締まりながら、警察権力の様々な形態を目に見える形で示すことなのである（Jamaica 1997）。

モルドバでは、土地の略奪からレイプ、暴行にいたるまであらゆる犯罪が増加し、村、町及び都市の貧しい人々は、家から出るのを恐れている。人々は、権力者からの脅迫、脅し、虐待に対して、自分達は脆弱だと感じている。地域社会内の信頼の欠如、市民と役人の間の信頼の欠如、地元の役人と警察の馴れ合い、そして、司法が建前と現実とではまったく違うという認識は、銀行システムに対する不信感と相まって、「市民の自主性と草の根レベルの活動に対する大きな抑圧」となっている（Moldova 1997）。

結論

即効性のある解決策は存在しない。警察に関する様々な問題は、国家そのものの機能不全と深く関わりあっているからである。犯罪、無法状態、腐敗、そして警察による貧しい人々の生活に対する嫌がらせの影響を考えると、貧困削減戦略において、貧しい人々が一層貧しくなっている点で、警察が果たす役割－つまり警察の業務によって、或いは業務をしないことによって無法状態に導いていることを無視することはもはや出来なくなっている。女性は特に脆弱である。イエメン共和国のPPAが提案しているように、男性の警官が運営する交番と同等の権力、資金、地位を備えている婦人警官によって運営される女性のための交番の設置が、考慮されるべきである（Republic of Yemen 1998）。

事例研究6.2　未亡人

この事例研究では2つの疑問を投げかけている。どのようにして、なぜ、未亡人は社会から排除されるのか、そして彼女達はその状況にどう対処しているのか、である。

どのようにして、なぜ未亡人は排除されるのか

> *夫が亡くなったとき、義理の家族に出て行くように言われました。それで私は町へ来て、アスファルトの歩道の上で寝ました。*
> —ケニアの中年の未亡人，Kenya 1996

> *女性は、夫が亡くなった時点で子供がいなければ、直ちに家を出るように告げられます。夫の死の原因を彼女のせいにされたり、魔女のレッテルを貼られることさえあります。そして、夫の親類達は、彼女が出て行くときには服以外何も持って行くなというのです。*
> —タンザニアで実施されたPPAの報告書より，Tanzania 1997

PPAの報告は、未亡人達が感じている社会からの疎外感には主に4つの理由がある、と指摘している。それらは、経済的に貢献できないこと、自分の財産を所有していないこと、ある特定の社会的役割を果たすべきだと考えられていること、そして、フォーマルなセーフティネットにアクセスできる機会は皆無に近いこと、である。

彼女達は貢献できない

> *彼女達は何の技術も持っていないのです。*
> —インドで実施されたPPAの報告書より，India 1997b

インドの報告でも述べられているように、未亡人達は家族にとって大きな経済的負担になると考えられている。「彼女達は自分の稼ぎがないため、家族の支えと助けに完全に頼るしかない。社会的に、彼女達はしばしば存在を無視され、家族にとって負担であると思われている。未亡人達は家族に目立った経済的貢献もできない上、何の技術も持っていないというのが、一般的な見方である」(India 1997b)。

このような見方をされながらも、実際のところ未亡人達はよく働いているが、彼女達には子供の世話をする義務があるため、できる仕事の範囲は極端に限られてくる。経済的側面から見た生産性の欠如は、彼女達自身の問題というよりも、むし

ろ彼女達をがんじがらめにしている多くの事柄との関係が深いと言えるだろう。グアテマラのある未亡人の女性は次のように述べている。「未亡人達には、手を差し伸べてくれる人が誰もいません。また、家を持ったり自由に作物を育てるためのほんの小さな土地さえもないのです」(Guatemala 1994a)。さらに、多くの文化的伝統や法制度により、一度家の資産となった財産にアクセスする権限を、未亡人達は与えられていない。結婚と同時につながりは絶たれたものとされているため、彼女達は生まれ育った社会ネットワークに助けを求めて頼ることも出来ない。

多くの女性にとって、汚名を着せられることなく、育児や夫を亡くした悲しみから逃れて、社会的に認知された有給の職を見つけることは、非常に難しい。しかし、財産も機会も社会支援もない中では、未亡人は生き抜くため、終わりなく無限に働き続けることを余儀なくされるのである。6児の母で、布を織り、売り物にする薪を拾い、時には洗濯屋もするというグアテマラの未亡人は、「私達が貧しいのは、働いても食べていけるだけの収入が得られないからです。仕事の収入は1、2日の食料分にはなりますが、すぐにまた次の数日間を食いつなぐため、職を見つけなければなりません。苦痛は毎日のことです。私達には休息などあり得ません、永久にあり得ないです」(Guatemala 1994a)。

彼女達は自分の財産を持たない

> *私の夫の死後、彼の弟は私の夫の第2夫人と結婚し、夫の所有していた家の関連書類を全て持って行ってしまいました。夫の弟は6つある部屋のうち4つを借りていますが賃貸料は払わず、現在私は所有者でも賃貸人でもありません。義理の弟は私の子供達の数人を使用人として貸しています。私はメードとして働き、皿洗い用の砂を売っています。砂は近所で拾い集めます。私は何か食料を見つけることができた日はそれを食べますが、それが出来るのも毎日ではありません。*
> —マリ・バマコ近辺の未亡人, Mali 1993

多くの伝統的社会では、夫が亡くなった場合、その妻は家族の財産に関する権利を一切取り上げられることが多い。つまり、未亡人達は、最も経済的余裕が無い時期に、収入が激減するという状況に陥るのである。また、信用貸付の市場から差別されることで、未亡人達の経済状況はさらに悪化し、彼女達が財産を得ることを一層難しくするのである。この問題は、PPAの調査対象となった女性の討論グループにおいても強調されていた。

> *ベニンでは、未亡人になると、息子が財産を相続できる年齢に達して*

いない限り、夫側の男性の親戚（一般的には兄弟）が家財の所有権を主張し、生産や交通の手段となるものや、家さえも、持って行ってしまう。アフリカのいくつかの地域では、未亡人達は丸1年、家の中に閉じこもっていなければならないとされている。そのため、実質的には、それまで収入を生み出していた何らかの経済活動から、手を引くことを余儀なくされ、施しに頼らざるを得なくなる。義理の兄弟が家財と共に未亡人をも「受け継ぐ」慣習は、家財の使用権を彼女が維持することを可能にし、また、夫がいるという事実が地位や保護の確立となるため、最も良い結果をもたらす方法の1つであると説明されている。
—ベニンで実施されたPPAの報告書より，Benin 1994

そしてナイジェリアでは、「このような女性は、新しいビジネスを始める時や自分を向上させるために借金をしようとする際、信用されない、と指摘された。また、彼女達は自分のプライバシーや所有物に対する脅しにも、苦しんでいる。具体的にいえば、伝統的な家族の規範に従い、未亡人や不妊症の女性は、夫側の親類に夫の財産を奪い取られてしまうのだ」（Nigeria 1995）。

彼女達は社会的責任を果たすことを求められている

近親との死別や葬儀は、残された者を貧困に追いやることがあります。
—ケニアで実施されたPPAの報告書より，Kenya 1997

夫の死がもたらす経済力の喪失にも関わらず、未亡人達は費用のかさむ地域社会の行事への参加をしばしば求められる。その中でも最も顕著なのは、夫の葬儀への出資を要求されることである。葬儀費用は、特に貧しい人々の収入の割合からすると、非常に高い。親戚同士で費用を出し合うという取り決めがある国もある。しかし、そのような親戚関係が存在しない場合、未亡人は、葬儀費用の全額を自分で払わなければならいこともある。「近親との死別と葬儀は貧困をもたらす。ケニアのキスムでは未亡人とその子供が破産してしまうことも珍しくない。これが残された家族の貧困の始まりである」（Kenya 1997）。

南アジアでは、娘の結婚持参金を用意することも社会的義務の1つである。

レハラはバングラデシュのマーヤ・バグラに住む35歳の女性だ。レハラの夫は10年前に亡くなり、彼女は3人の子供を女手1つで育てた。息子はレハラの貯金を全て浪費し、結婚して家を出ていった。彼女は現在メードとして働いている。2人の娘も結婚した。長女の

相手はリクシャ（人力車）引き、次女の相手は日雇い労働者である。娘達が結婚する時、レハラは持参金を用意するのは無理だと伝えた。しかし婚約者達は毎日、金、家具、台所用具、マットレスなどを要求した。彼女は息子が助けてくれると思ったが、彼は他人事のようにあしらった。レハラにはすでに3万タカという莫大な借金があり、それを返済することも、義理の息子達に要求されている持参金を渡すことも出来ないだろうと感じている。
—バングラデシュで実施されたPPAの報告書より，Bangladesh 1996

未亡人達は、国や地域社会のセーフティネットからの支援を、ほとんど受けていない

仮に援助が受けられるとしても…、それで何が変わるのか、誰もわからないだろう。
—モルドバで実施されたPPAの報告書より，Moldova 1997

未亡人達を直接支援するような援助プログラムは、ほとんどないと言ってもよい。そのため彼女達は、年金や貧しい人々を対象とした政府発行の小切手等、適用されうる別の援助を探さなければならない。さらに未亡人達は、その他の貧しい人々や社会から排除されている集団と同様、政府の政策に対する影響力を持ち合わせていない。政治家が、政治そのものに無関心で汚職に手を染めている上、彼女達には力がないので、経済的にさらに追い込まれていくのである。

未亡人達はどのように対処しているのか

未亡人達は様々な方法でこの状況に対処しようとしている。PPAの報告書で最も一般的だったのは、インフォーマルセクターでの労働に従事する、子供を退学させる、補助制度のような権利があるならそれを利用する、実家に帰る、移住する、及び売春婦となる、等であった。

彼女達はインフォーマルセクターにおける雇用を探し求めている

女性にとって、人生を再出発させることは難題である。
—タンザニアで実施されたPPAの報告書より，Tanzania 1997

マクエウィン・スコットによると、前述のように、未亡人達は置かれている状況を緩和するために働く。彼女達は性差別によりフォーマルセクターでの雇用の道を

閉ざされることもあり、インフォーマルセクターで働くことを余儀なくされる（MacEwen Scott 1995）。タンザニア農村部にある女性団体は次のように報告している。「女性にとって、人生を再出発させることは難題です。稼ぎを得るため青空市場で食べ物を売ったり、出来高払いの仕事に従事したり、売春婦になる人もいます。教育を受けていない多くの女性は、自分の法的権利を知らず、しまいには長距離輸送トラックの運転手と一緒にダル・マラウィやルワンダへ移動するのです。彼女達が再び戻ってくるのは、すでに妊娠した後です」（Tanzania 1997）。

マケドニアのある未亡人は、自分は物乞いをしていると説明した。「彼女は毎日3歳の子供を連れ、ビルの中や横断歩道の脇で物乞いをする。彼女はそれで1日約150デナー程稼いでいる。彼女は物乞いをする場所までバスで行くが、料金は払わない。運転手達は彼女のことを知っているので、運賃を請求しないのだ」（Macedonia 1998）という。彼女には金銭的余裕が無いので、彼女の子供達は学校には通っていない。

生き抜くための苦闘は、多くの国で未亡人にのしかかる。「ベトナムのマイは37歳の未亡人である。夫は彼女が妊娠3ヶ月のときに亡くなった。妊娠中で働くことが出来ず、幼い2人の子供を育てるのに必死だった彼女は、すぐに借金地獄に陥り、食料を手に入れるため、土地を抵当に入れなければならなくなった。現在、マイは家政婦として働いているが、まだ2百万ドンの借金を抱えている。彼女は現在、午前6時半から午後5時まで働きに出ている。今抱えている問題は、まず土地を買い戻すだけの資金を貯めなければいけないこと、次に孤独感だ、と彼女は語る。彼女の現在の夢は、ブタとアヒルを育てるための資金を貯めることで、一方、彼女の娘の夢は、母親が借金返済の義務から解放されることだという」（Vietnam 1999a）。

彼女達は子供を学校から退学させる

> *生きていかなければ。ただそれだけです。*
> —モルドバで実施されたPPAの報告書より，Moldova 1997

子供を学校に通わせないという難しい選択をすることも、未亡人達が生き抜くための1つの手段である。この場合、母親は息子よりも娘を退学させる傾向にある。娘は児童労働で収入を得ることができ、また、母親が外に働きに出ている間に家事をすることも出来るからである。「4人の子を持つモルドバのある若い母親は、ごみ箱の中の段ボールあさりをさせるため、3人の就学期の子供達を学校に通わせていないという。『生きていかなければ。ただそれだけです。燃やす物がなければ死んでしまうのです。私の子供達は、学校に通うことができません。なぜ

なら、彼らなしでは、必要な量の段ボールを毎日集めることができないからです』」と彼女は説明した（Moldova 1997）。

制度が整備されている場合には、未亡人達は国や地域社会の補助制度に頼る

> *年金がなかったら…、崩壊してしまう家庭や地域が続出するだろう。*
> ―南アフリカで実施されたPPAの報告書より，South Africa 1998

未亡人が高齢な場合、年金は重要な収入源となり、その効果は、未亡人だけでなく、相乗効果で、彼女の住む地域社会のためにもなるのである。南アフリカのPPAは次のように報告している。「年金がなかったとしたら、崩壊してしまう家庭や地域社会が続出することは、明らかであっただろう。年金は家庭や地域社会で共有され、家の資産への投資や生活の利便性向上のために役立てられている。さらに、両親のいない孫を持つ年金生活者にとっては、年金が、孫に対する援助の唯一の資金源となる場合も非常に多い。また、年金は高齢者の家族内における地位を保障する点においても役立つ（逆に、家庭を離れたいと思ったときには、年金があるがゆえにそれができる）。このように、年金によって、高齢者が自分の生き方を少なからず自分で決めることができるようになるのだ」（South Africa 1998）。

中国における事例では、未亡人達に援助が直接渡る場合もある。「共同福祉基金は、1. 高齢者、2. 肉体的に衰弱している人、3. 配偶者と死別した高齢者（男女）、4. 食費、衣服費、医療費、住居費、埋葬費を必要としている孤児、5. 特に貧しい人々といった、5種類の家庭を対象とした支援を提供している」（China 1997）。

しかし、一般的に、国は未亡人を直接の対象として、セーフティネットを設定しているわけではない。いくつかの事例では、未亡人が、地域社会や家庭内の援助にアクセスしている場合もある。

> *パキスタン社会では、未亡人と高齢者は手厚く扱われ、社会ネットワークとのつながりを持つ人々は、ある程度の援助とケアを受けることが出来る。その代わりとして、彼らは子供の世話、家事、そして収入につながるような仕事を手伝うのだ。それにもかかわらず、高齢者や未亡人を支援する立場の者達は搾取されており、援助の余裕は、ほとんど或いは全くない。未亡人は殆どの社会セーフティネット・プログラムの対象になってはいるが、全体として、高齢者問題でさえ社会全体で特に優先されてきたわけではなく、そもそも未亡人達は必ずしも高齢者とは限らない。*
> ―Pakistan 1993

未亡人達は実家に戻る

娘には家族から何も相続させてやれないとわかっているから、実の父親までもが娘を家に入れることをためらってしまうのです。
—タンザニアで実施されたPPAの報告書より，Tanzania 1997

夫の死後、未亡人が自分の実家から支援を得ることが出来る程度は、文化によって異なる。東欧と旧ソ連では、他の地域の開発途上国に比べ、この点についてあまり言及されていない。血縁関係がセーフティネットの役割を果たすサハラ以南のアフリカでは、未亡人は血縁関係には含まれていない。例えば、ケニアでは、未亡人となった女性達は実家で歓迎されず、多くの場合、売春婦になったり辞めたりを繰り返しながら、何とか生計を立てようとするため、そこから最も近い街へ行く、と報告されている（Kenya 1996）。タンザニアのある女性は「女性にとっては悲劇です。娘には家族から何も相続させてやれないとわかっているから、娘が何も持たずに帰ってきても、実の父親までもが娘を家に入れることをためらってしまうのです。離婚や別居していた家族は、父親の農場ではなく、教会の墓地に埋葬されます。農場の中に彼女達の場所は無いため、農場の隅に埋葬する地域もあります。農場は彼女の息子のものになっているのです」と訴えている（Tanzania 1997）。

未亡人達は移住する

私はあらゆる場所へ行きました。歯をくいしばって、子供達を連れて。
—南アフリカで実施されたPPAの報告書より，South Africa 1998

南アフリカの農村部に住む未亡人達にとって、社会的に認められた職を手にすることは、どちらかというと困難であるため、多くの未亡人達は都市部を目指して移住する。しかし、このことが結局、彼女達の立場を一層脆弱なものにするのである。都市部に親戚がいることもあるが、ほとんどの場合、そうではない。ある高齢の未亡人は言う。「まったく、（農場から追い出された後の）ここ何年かは、転々とさせられ、行く先々で非難され、けなされました。だから、歯をくいしばって子供達を連れて、私はあらゆる場所へ行きました。私はポート・アルフレッド近くの海岸を目指して移動しました。生活を支えるため、そこで白人を相手にした仕事が何かないだろうかと思い、1年間ここで過ごしました。そして次の2年を別の場所で過ごし、その次の1年をまた別の場所へ、という風にしてきました。そして私はチコリー農場で働くためマンリー・フラッツに戻ってきましたが、そこでの仕事は私の子供達にとって、体力的に非常にきつかったため、グラハムズタウンにいる娘と一緒に生活することになったのです」（South Africa 1998）。

未亡人達は売春婦となる

夫の死後、収入を得るため様々なことを試みましたが、最も効率の良い方法は売春でした。
—マケドニアの2児の母である未亡人，Macedonia 1998

収入を得なければならない状況の中、売春婦となることを選ぶ未亡人がいる。病気の感染の恐れや仕事に対する社会的汚名もあるので、未亡人達や貧しい女性達にとって、この仕事は最後の手段である。カメルーンでは「売春の率が高いことについては、2つの大きな理由がある。それは(a)高い失業率、(b)経費節減と大幅な給料の削減であり、これはヤオウンデとドゥアラで商業的性労働に従事している女性達への聞き取りで明らかになった。東部の10代の少女や仕事のない女性達は、絶望的な口調で、『商品として販売できる食料はあるけれど、(それを)買ってくれる人は誰もいません。たとえいたとしても代金を少ししか払ってくれないので、これ以上苦労して農作業をしても仕方ありません。こんな板挟みに直面した女性が、体以外に一体何を売ればいいというのですか』」と訴えるという(Cameroon 1995)。

結論

ここでの調査結果は、政策を変えることで未亡人やその家族の生活と家計の改善を可能とする4つの分野を提案している。その分野とは(1)財産権の強化、(2)雇用機会の拡充、(3)セーフティネットの改善、(4)地域社会レベルでの関与である。

財産権の強化は、未亡人を排除している経済原理に対抗するものである。未亡人が自分の財産を所有している場合、人々は彼女達を支援し、彼女達のために働こうとする傾向がある。このような社会的・経済的な財産は、将来の危機に備えて、より良い保障を未亡人に与える。

雇用機会の拡充は必要不可欠である。未亡人達は、自分達が雇用市場から差別を受けており、インフォーマルセクターで働くことを余儀なくされているため、給料が安く、雇用も不安定である、と感じている。バングラデシュでは、雇用機会は全ての女性にとって最も重要な優先事項の1つである。それ故、フォーマルセクターにおける未亡人や女性に対する差別を、より広い範囲で撤回し、特に、貧しい女性のほとんどが選択せざるを得ないインフォーマルセクターにおける状況の改善が、極めて重要となっている。彼女達への資金の流れを円滑にし、社会的地位を高め、精神的な安心感を与え、子供を学校に通わせることが出来、医療サービスの利用が可能になる、といった効果が期待できるため、自営業を始められるよう

に支援することは、特に有効であると思われる。自分達が求めているのは施しではなく、就業の機会であるという思いを、多くの女性達が語っている。それができれば、外部からの援助を懇願する必要もなくなるからである(Bangladesh 1996)。

国家、そして地域社会から資金援助を得ているセーフティネットは、未亡人にほんのわずかな保障しかもたらさない。未亡人が大黒柱となる家庭が、長期的な経済状態の改善を図る上で必要なリスクを負わなければならない時、それに対する最低限の保障が必要である。未亡人達が貧困から脱し、社会の中での自分の役割を再定義できるような機会や自由にアクセス出来るよう、これらのセーフティネットは機能していなければならない。

根強く残る社会的規範を考えると、地域社会レベルでの仲裁機能は、未亡人達が直面している社会的・経済的重圧を、世に知らしめるために必要である。彼女達に対する直接支援の必要性は、多くのPPAに強く表れている。未亡人達を経済的・社会的連帯に取り入れるような、地域社会を基盤としたプログラムによって、彼女達の生活を変えることができるのである。